DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の購入・閲覧禁止
寝取られマスター
～担当アイドルが催眠で壊される～
Presented by 530

「ドラマのお仕事……ですか？
私が…」
「ああ、インターネット配信
の番組らしいんだが……」
「そのあたりは問題ないはずだ
文香の素のキャラクターが
欲しいって聞いてるからな」
「文香のステージを見た
監督から出演してほしいと
事務所にオファーがきたんだ」
「はあ…ドラマということは
演技…ですよね？
私に務まるでしょうか…」
「……ただ――」
「ただ…？」

「いや、向こうの意向としては
軽いキスシーンなんかを
入れたいらしいんだ…
もちろん振りだけにする、
とは聞いてるんだが…」
「……」
「実際に俳優と向き合うのは文香だ
現場の勢いや事故で万が一…
という可能性はゼロじゃない」
「文香が少しでも嫌なら断ろう。
本人の意思を無視して
断るわけにもいかないから
話したが…俺としてはむしろ…」
「プロデューサーさん…」
「アイドルとしてのイメージ
もあるし…いやしかし…」
「プロデューサーさん
少し屈んでもらえますか？」

ちゅっ
「ふ、文香……!?」

「文香、な、な、なにを…」

「これで…たとえ万が一、が起きてしまっても大丈夫です。私のファーストキスはプロデューサーさんにあげてしまいましたから…」

「……！　文香…」

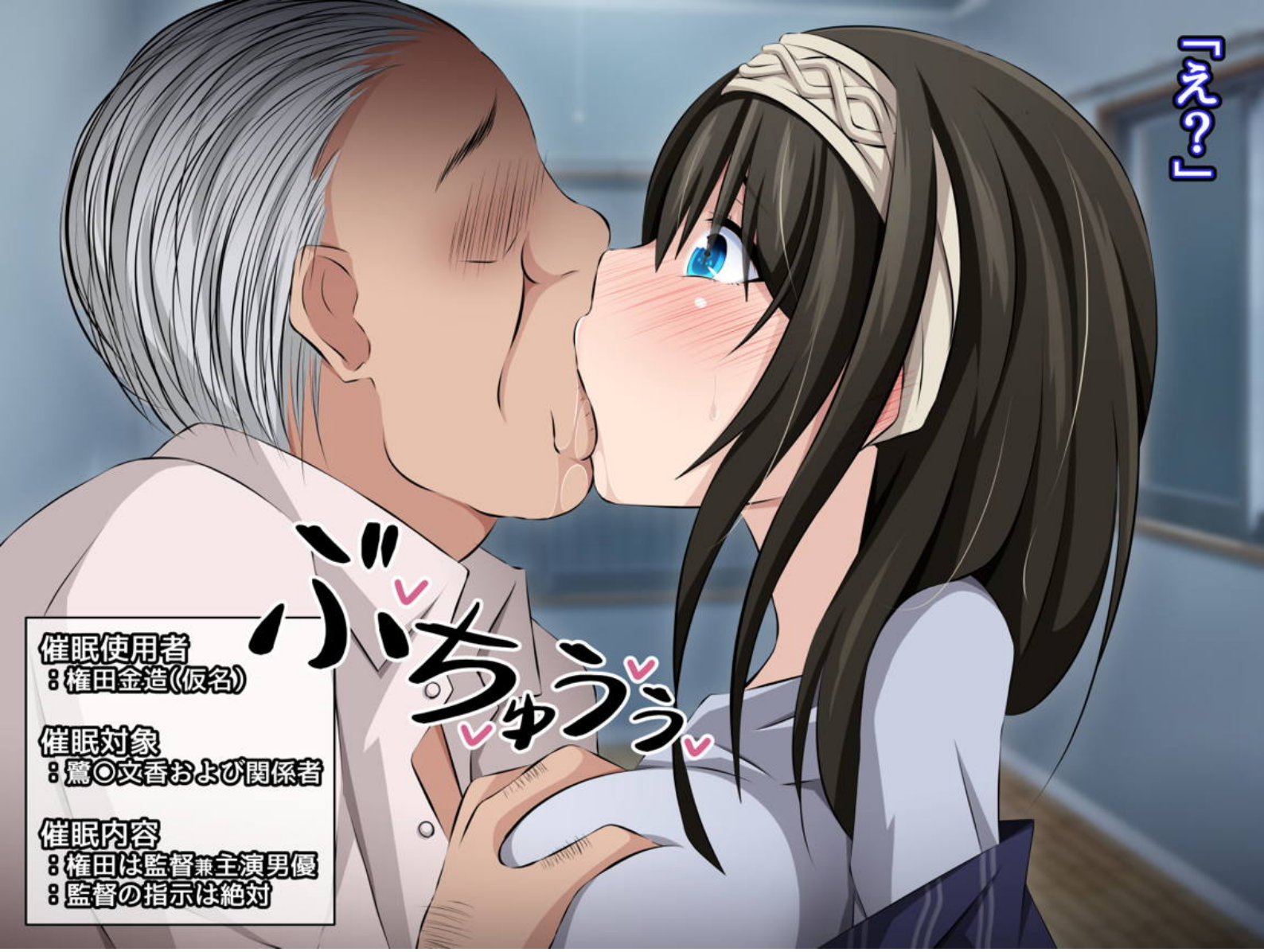
「私…やります。せっかくいただいたお仕事…頑張ってみます」

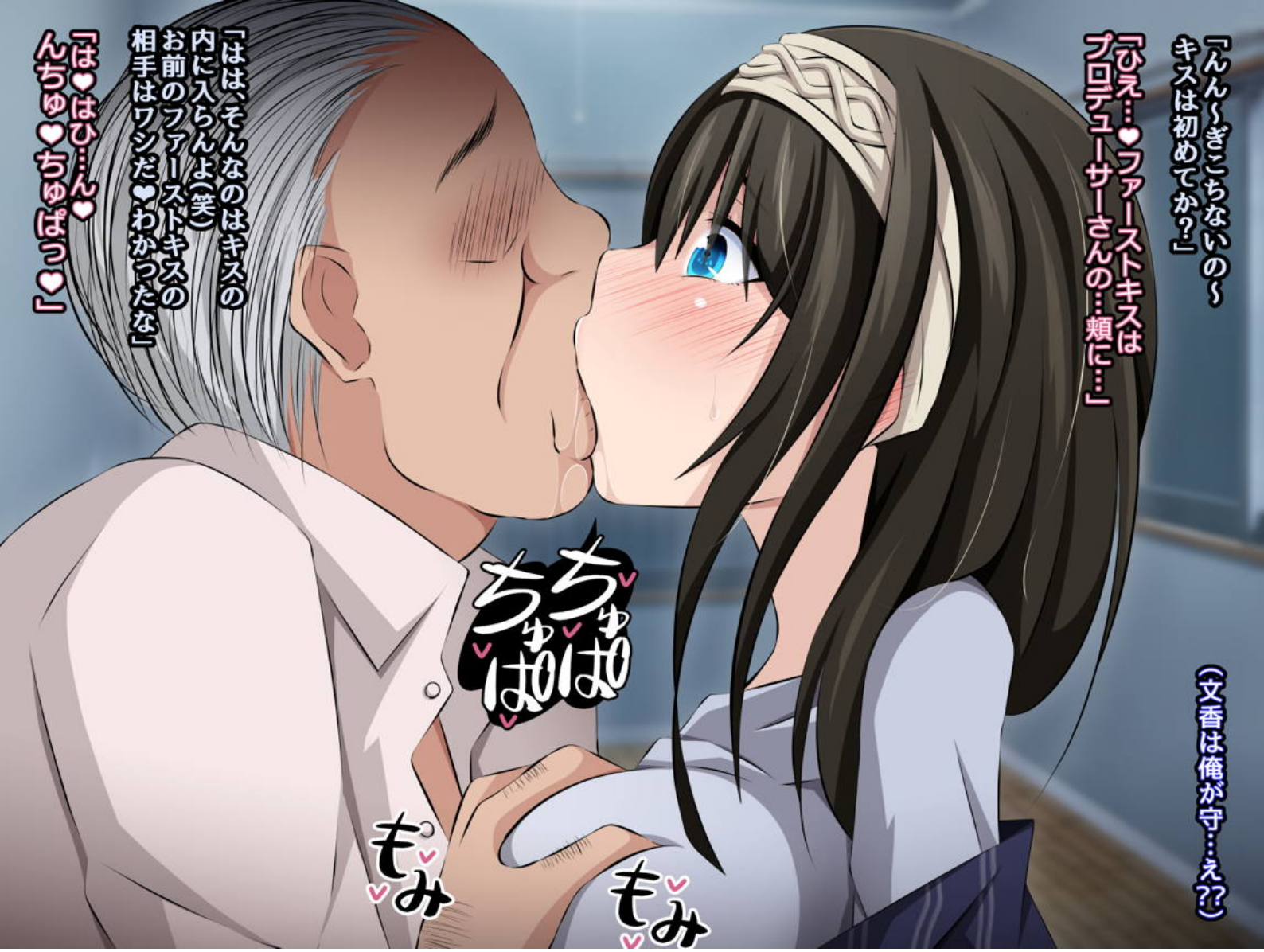
「本当に…いいのか？」

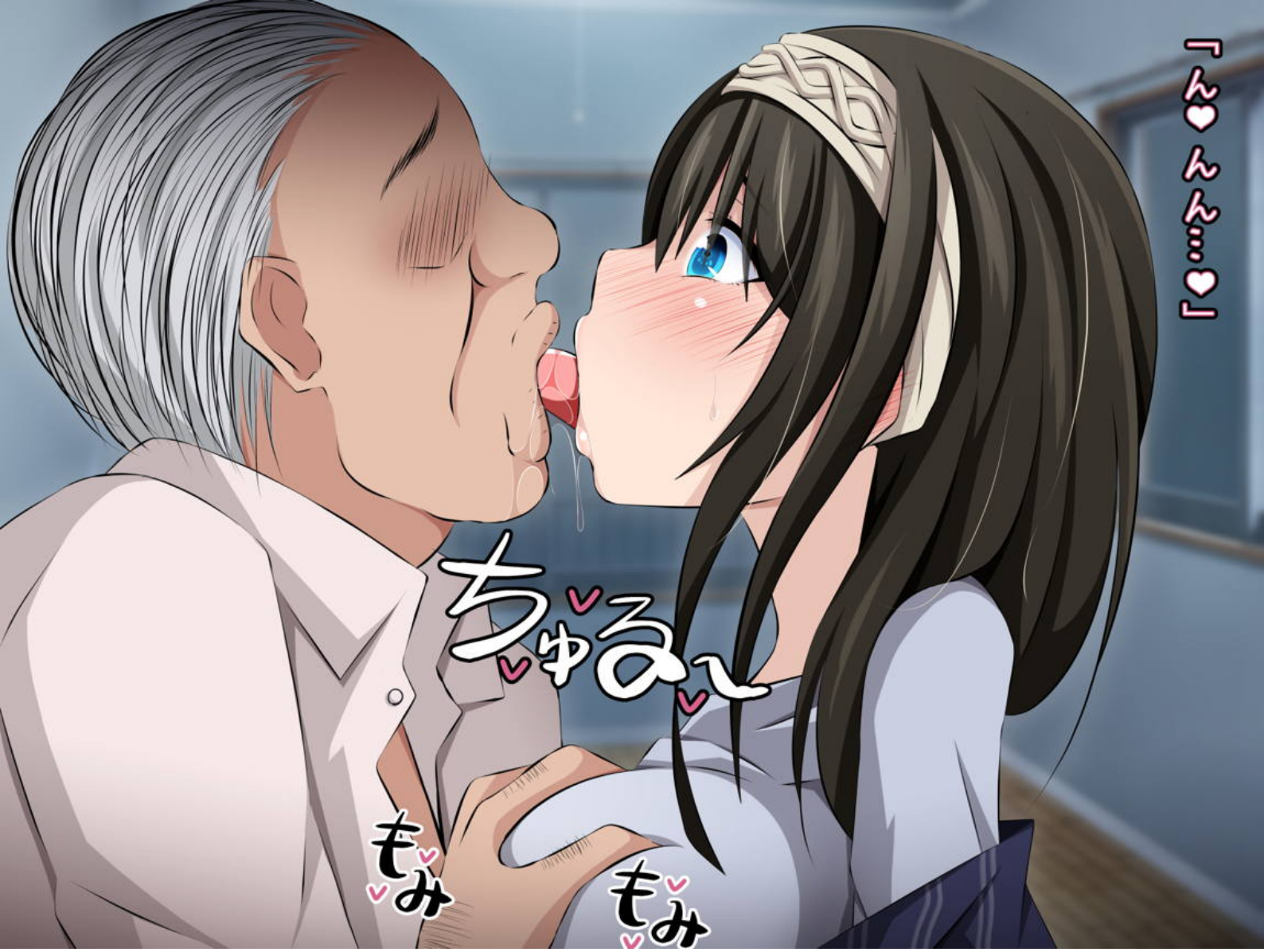
「はい。貴方に出会えて私は少しだけ変われました……勇気を出して、もっと前に進みたいんです」

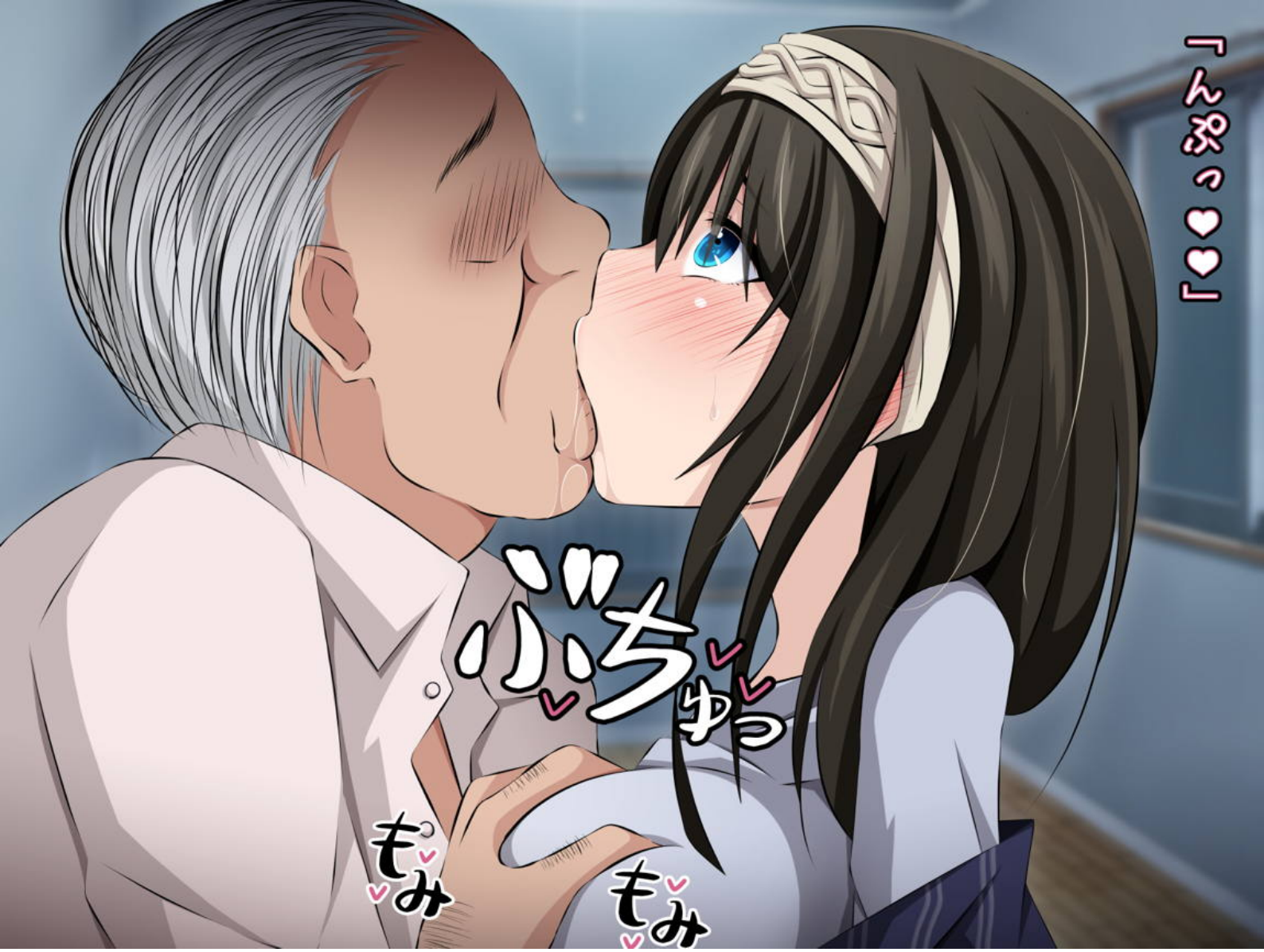
「プロデューサーさんと一緒に次のページに……知らない世界に」

「文香……
……ああ、そうだな。
安心しろ…！
文香のことは俺が――」

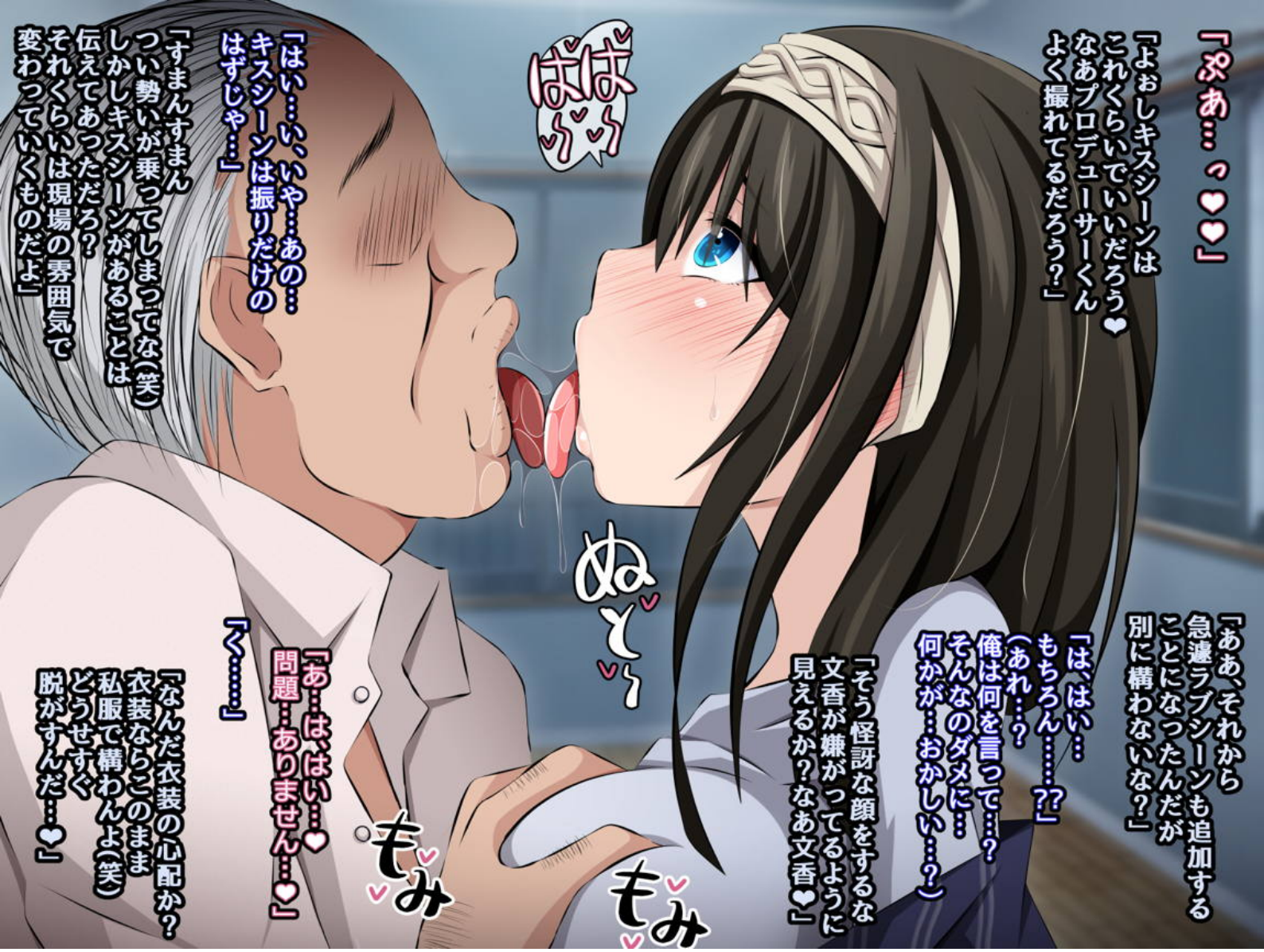

「え？」
ばちゅう
催眠使用者
：権田金造（仮名）
催眠対象
：鷺○文香および関係者
催眠内容
：権田は監督兼主演男優
：監督の指示は絶対


「んん～ぎこちないの～
キスは初めてか？」
「ひえ…♥ファーストキスは
プロデューサーさんの…頬に…」
（文香は俺が守…え？）
「はは、そんなのはキスの
内に入らんよ（笑）
お前のファーストキスの
相手はワシだ♥わかったな」
「は♥はひ…ん♥
んちゅ♥ちゅぱっ♥」
ちゅぱちゅぱ
もみ
もみ


「んん♥んん…♥」
ちゅるぅ
もみ
もみ


「んぷっ♥♥」
ぶちゅっ
もみ
もみ

「ほらもっと舌を絡ませなさい愛し合う二人の濃厚なキスシーンだぞ❤」
ぬろ
ぬろ
ひちゃ
ひちゃ
ちゅっ
ちゃんっ
じゅっ
ちゅっ
ぱっ
るっ
ちゅっ
ぱっ
ちゅっ
ぱっ
ちゅっ
ぱっ
るぉ
もみ
もみ
『は…はひっ❤』
「そうそう上手だぞぉ…下品な音を部屋中に響かせるんだ❤ワシのことを心の底から慕う気持ちを忘れるな」
「よぉ～しよし❤ワシも愛してるぞぉ文香…❤」


「ぷあ…っ♥♥」
「よぉしキスシーンは
これくらいでいいだろう♥
なあプロデューサーくん
よく撮れてるだろう？」
ぱぱら
「ああ、それから
急遽ラブシーンも追加する
ことになったんだが
別に構わないな？」
「は、はい…
もちろん……??」
（あれ…？
俺は何を言って…？
そんなのダメに…
何かが…おかしい…？）
「そう怪訝な顔をするな
文香が嫌がってるように
見えるか？なあ文香♥」
ぬとぉ～
もみ
もみ
「はい…い、いや…あの…
キスシーンは振りだけの
はずじゃ…」
「すまんすまん
つい勢いが乗ってしまってな（笑）
しかしキスシーンがあることは
伝えてあっただろ？
それくらいは現場の雰囲気で
変わっていくものだよ」
「あ…は、はい…♥
問題…ありません…♥」
「く……」
「なんだ衣装の心配か？
衣装ならこのまま
私服で構わんよ（笑）
どうせすぐ
脱がすんだ…♥」

「あ…っ♥」
「よしよし、指定通りちゃ～んと下着は脱いできたか――
おお、これはこれは…♥農の目に狂いはなかったなぁ♥」
「……!!」
「は…はい…すみません…♥」
たゆっ
ガバッ
たゆん
「文香ぁ…駄目じゃないか。せっかく豊満に育った身体をこんなゆったりした服で隠しちゃあ…♥」
「これからはもっと身体のラインが出る服を着るんだぞ？カリスマギャルみたいな下品なやつを農が見繕ってやるからな♥」

「あうっ♥」
「なんだコレは♥手に収まりきらんじゃないか♥この極上ボディに手をつけずにいるとは…周りの男はボンクラばかりだな(笑)」
「い、いや、私は…」
「ああ、よいよい(笑)それよりも撮影チェックの方しっかり頼むよ」
もみ
もみ
もみ
「ん♥ふう…♥うう…♥♥」
「感度も良好…と♥今まで何人ものアイドルと共演してきたがその中でも最上級品だぞ♥なあプロデューサー?キミもこの身体に惚れこんで文香をスカウトしたんだろ?」
ムギュ
「そろそろ前戯は終わりにして本番に入るからな♥」

「ひ…っ
ぷ、プロデューサーさん…っ」
「送っておいた
エロタイツも履いて
きたか。
偉いぞ文香ぁ❤
しっかり催眠が効いてるな
さて、それじゃあ
早速…」
「ま、待って
ください…!!」
「――――!!」
(い、いくらなんでも
これは…っ!
ドラマの撮影だからって…
いや…そもそも本当に
ドラマ撮影なのか…?
こんなベッドしかない
空き家みたいなところで…
スタッフもいないし
おかしいんじゃ…ないか…!?)
くちゅ
「ん~? 何かね
プロデューサーくん」

「ドラマ撮影でここまでするなんて認められません…っ!!そもそも本当に――」

「処女くらい捨てられんで女優が務まるか。……なあ文香？　お前は覚悟できてるよな？」

「うぅ…は…あ………は、い……♥」

「ほれ聞いたか？覚悟ができていないのはキミだけだよプロデューサー(笑)」

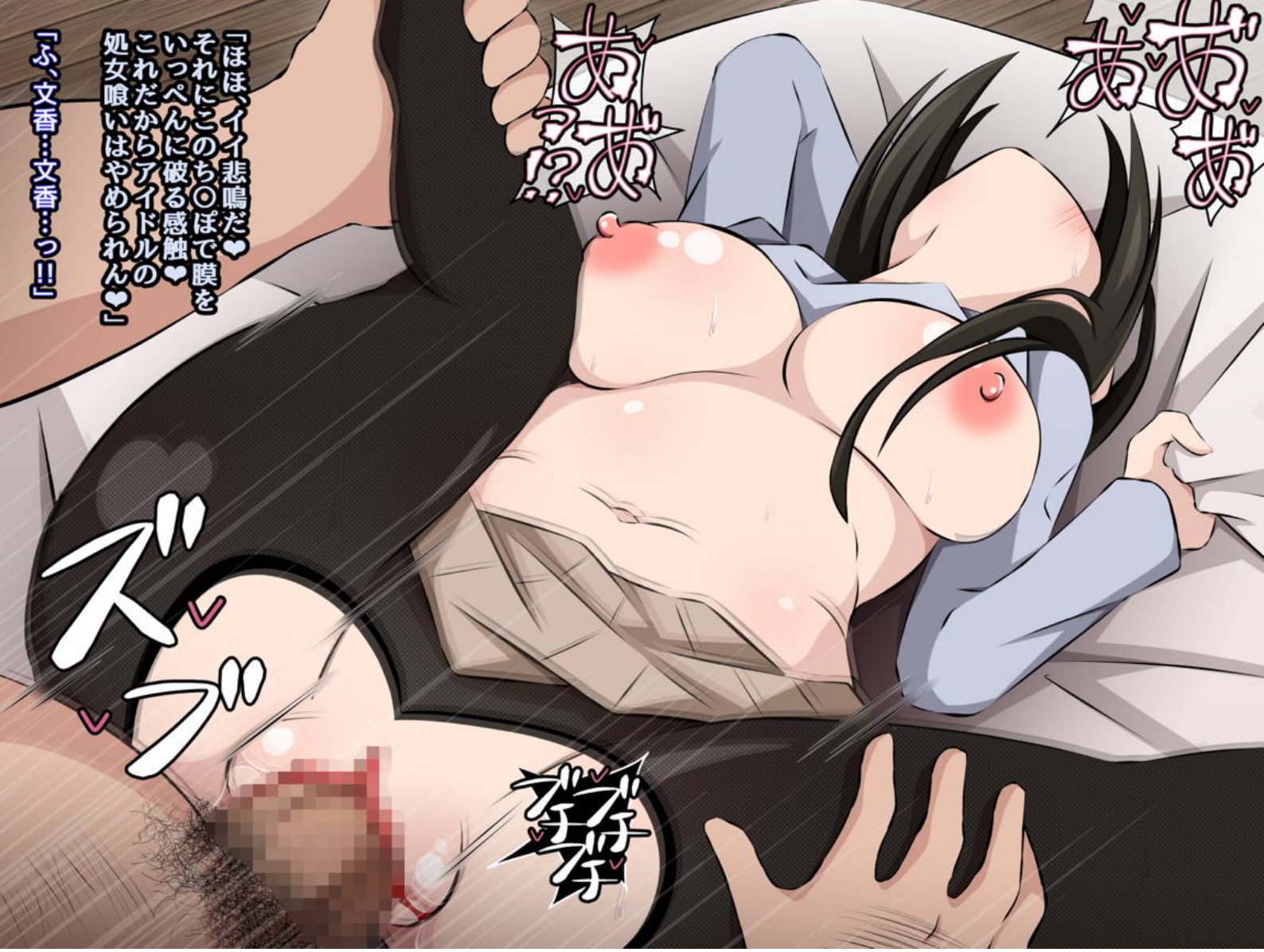
「何を言っておる…ドラマのラブシーンでリアリティを出すため実際にセックスをするなんて当たり前の話だろ？ドラマ撮影以外でこんなことをしたらただのレイプになってしまうじゃないか(笑)儂がそんなことするわけあるまい？」

「そ…う…??そ、それは…そうですが…しかし文香は……っ!!」

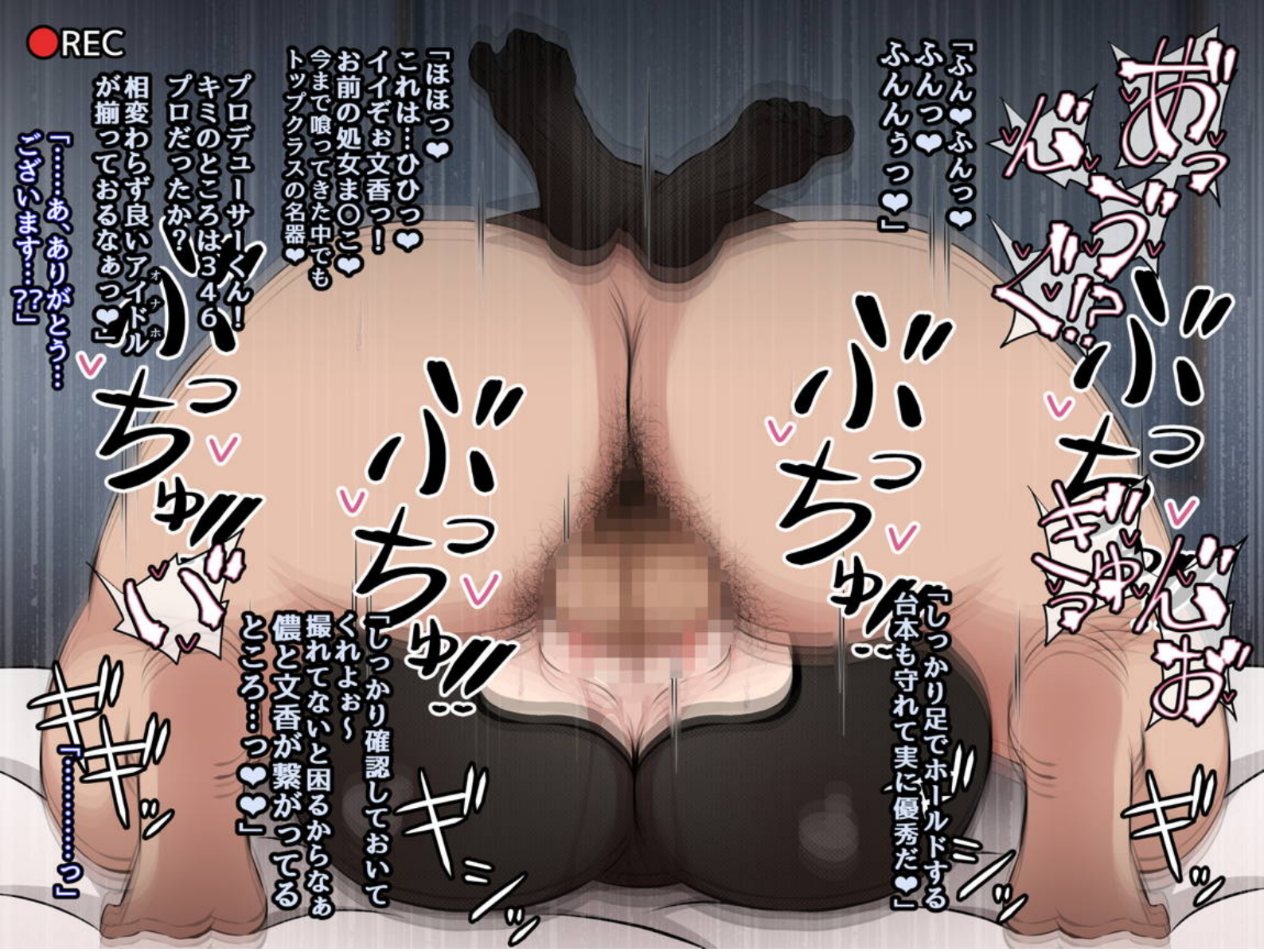
「それじゃあ文香、次のシーンの台詞を言ってみようか。もちろん笑顔でな♥」

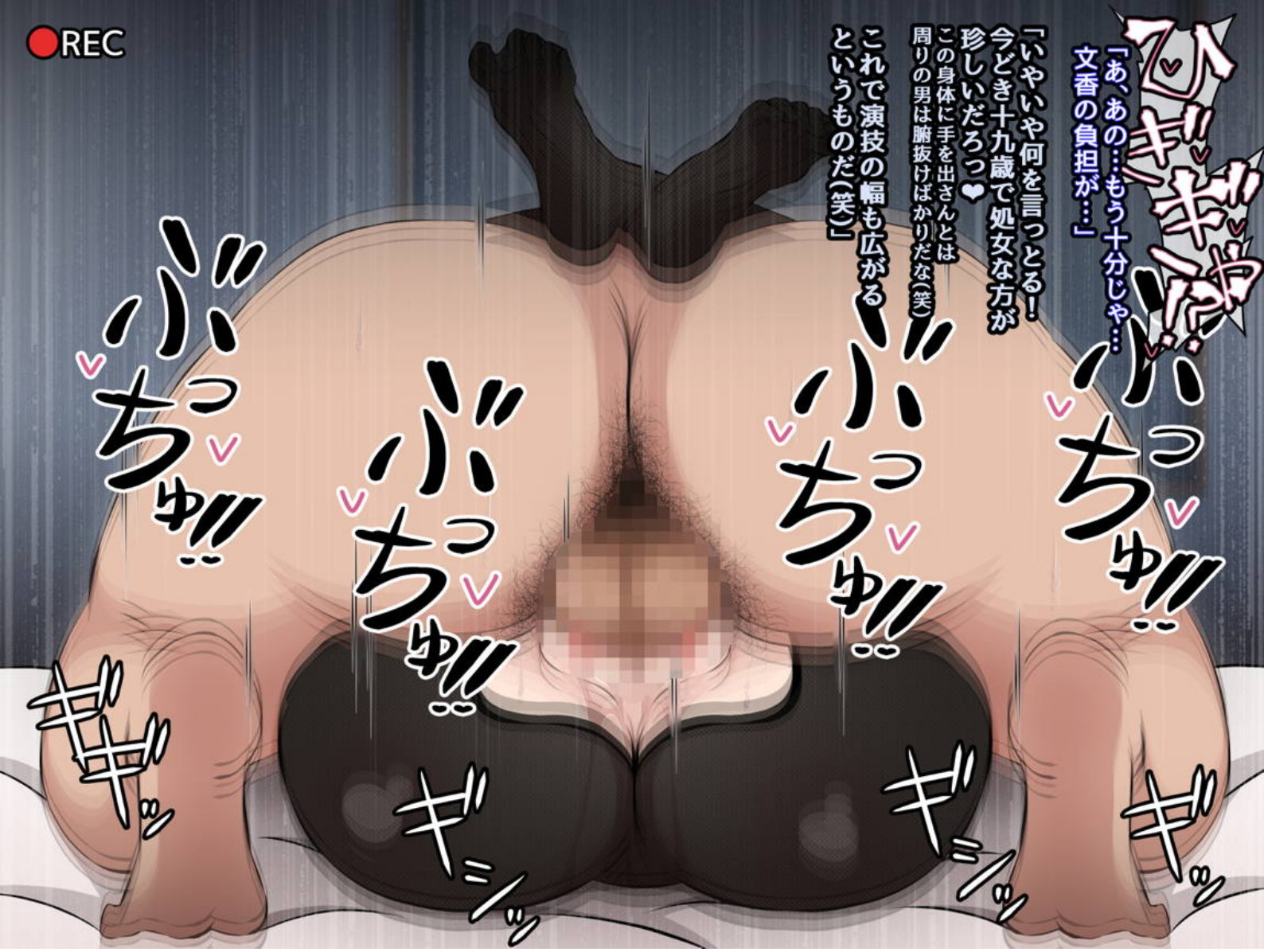
くちゅ…

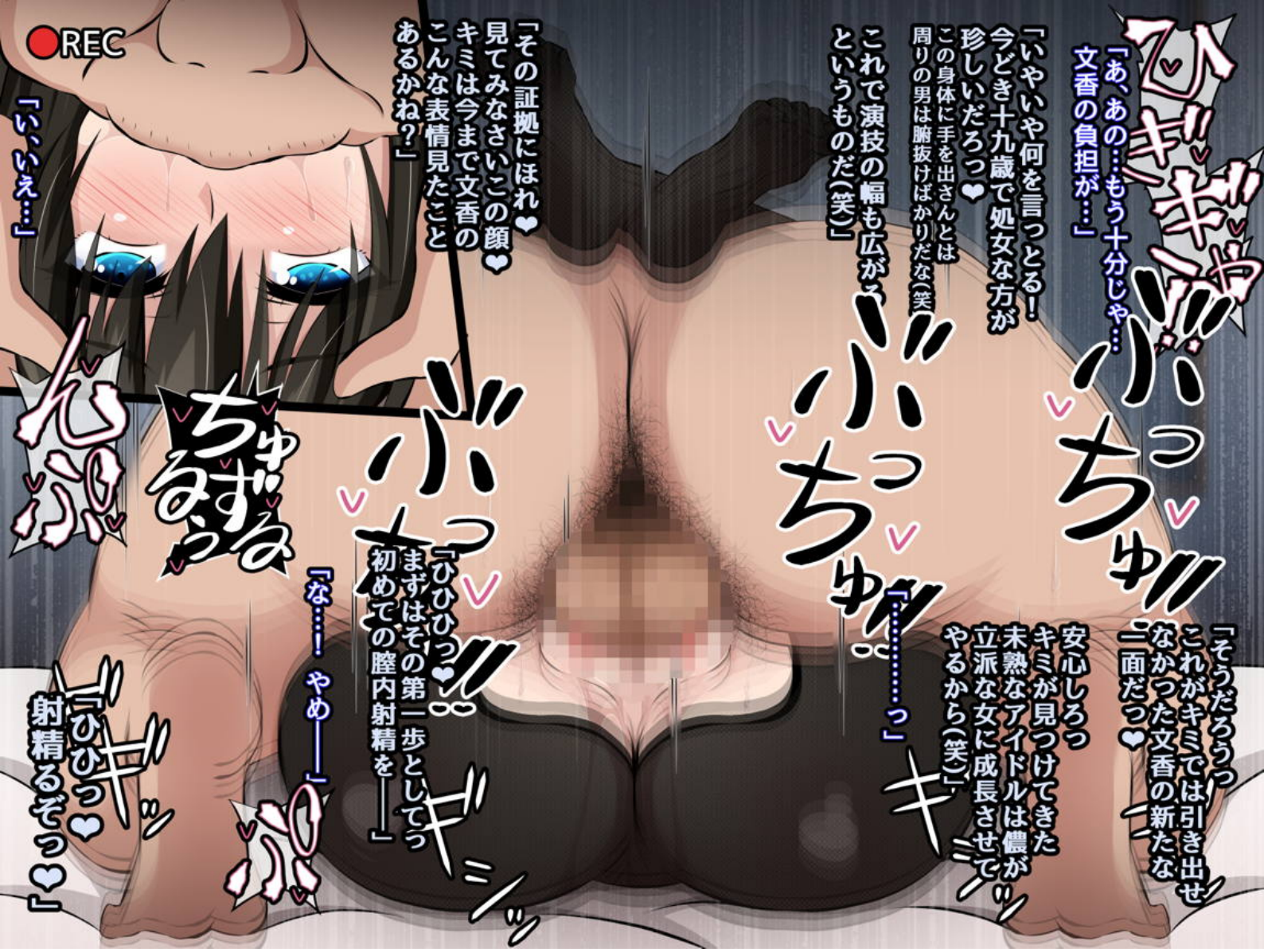
「あ、あの…私…文香の…19年間守ってきた、しょ、処女…を♥」
「文香の処女ま○こも美味しくいただいてやるぞ♥」
「おじさまのおち○ぽで思いっきり貫いてっ♥文香をおじさまの女にしてくださいっ♥」
「それいくぞ～3・2・1―――」
「ふ、文香…っ!!」
「よしよし♥よく言えたなぁ…♥なあに任せておけ。こう見えて儂は百人以上のアイドルをこのち○ぽで女にしてやってきたからな…♥」
くちゅ♥
「あ―――」


ぉぉぉ
ぉぉ!?
「ほほ、イイ悲鳴だ❤それにこのち○ぽで膜をいっぺんに破る感触❤これだからアイドルの処女喰いはやめられん❤」
「ふ、文香…文香…っ!!」
ズブ
ブチブチブチ

びくっ
バ
「二人が気の済むまでひたすらに何度も愛し合うシーン…❤これがドラマのメインだろ❤」
「な――」
「まあそれは儂と文香に任せて❤」
「ひひひ❤痛いかぁ文香？一生に一度の痛みだからな…しっかり味わうんだぞ❤」
「も、もういいだろ…っ早くソレを抜いて――」
「何を言っておる、本番はここからじゃないか❤」
ニヤ
「プロデューサーくんはそこで映像チェックでもしながらのんびり待っていてくれ(笑)」


●REC
「ほほっ❤
これは…ひひっ❤
イイぞぉ文香っ！
お前の処女ま〇こ❤
今まで喰ってきた中でも
トップクラスの名器❤
プロデューサーくん！
キミのところは346
プロだったか？
相変わらず良いアイドル
が揃っておるなぁっ❤」
「……あ、ありがとう…
ございます…??」
「ふん❤ふんっ❤
ふんっ❤
ふんんぅっ❤」
「しっかり足でホールドする
台本も守れて実に優秀だ❤」
「しっかり確認しておいて
くれよぉ～
撮れてないと困るからなぁ
儂と文香が繋がってる
ところ…っ❤」
「……っ」
ぶっちゅ
ぶっちゅ
ぶっちゅ

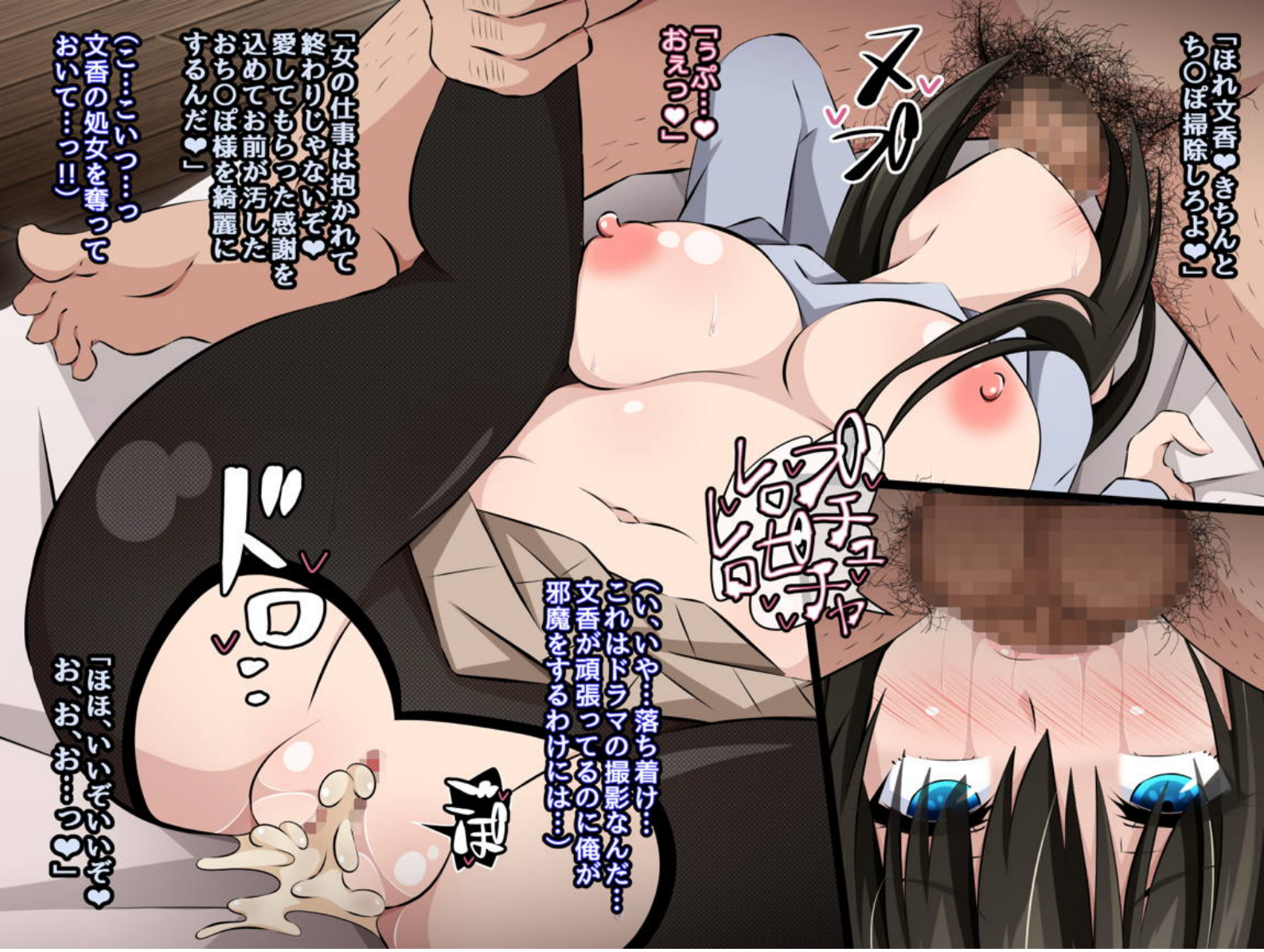

●REC
ギギッ
「あ、あの…もう十分じゃ…文香の負担が…」
「いやいや何を言っとる！今どき十九歳で処女な方が珍しいだろっ❤この身体に手を出さんとは周りの男は腑抜けばかりだな(笑)これで演技の幅も広がるというものだ(笑)」
ぶっちゅ!!
ぶっちゅ!!
ぶっちゅ!!
ぶっちゅ!!
ギッ
ギッ
ギッ
ギッ


●REC
「あ、あの…もう十分じゃ…文香の負担が…」
「いやいや何を言っとる！今どき十九歳で処女な方が珍しいだろっ❤この身体に手を出さんとは周りの男は腑抜けばかりだな(笑)これで演技の幅も広がるというものだ(笑)」
「そうだろうっこれがキミでは引き出せなかった文香の新たな一面だっ❤安心しろっキミが見つけてきた未熟なアイドルは儂が立派な女に成長させてやるから(笑)」
「……っ」
「ひひひっ❤まずはその第一歩としてっ初めての膣内射精を――」
「な…！やめ――」
「ひひっ❤射精るぞっ❤」
「その証拠にほれ❤見てみなさいこの顔❤キミは今まで文香のこんな表情見たことあるかね？」
「い、いえ…」

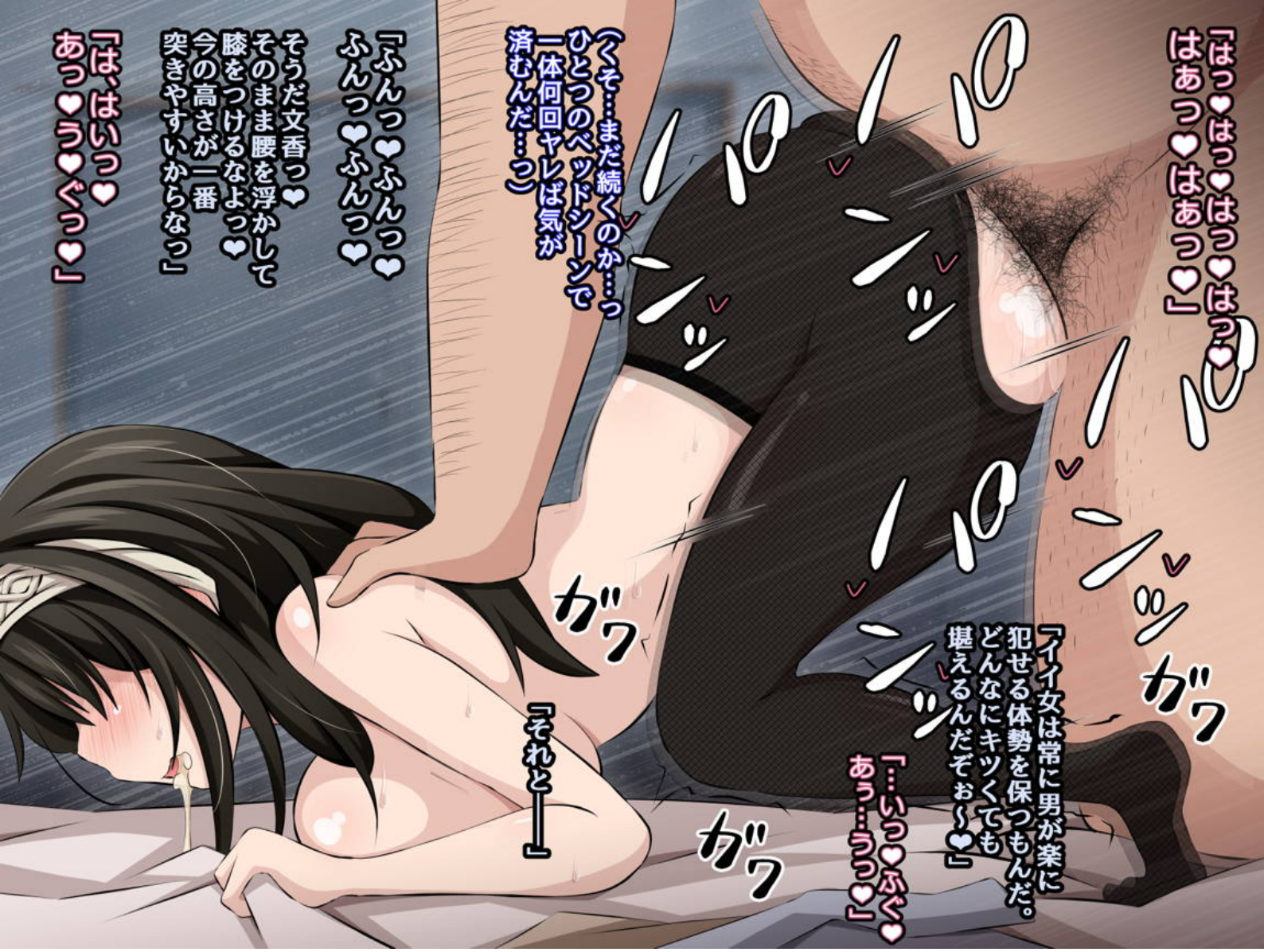
●REC
「あ――」
「ほっ❤ほほぉっ❤射精る…っ❤射精るぅ…っ❤」
「初めてのくせに搾り取ってきおる❤貪欲な未成年ま○こめ…っ❤」
「濃の子種を受け入れたアイドルは大成すると評判なんだぞ❤」
「よかったなあ文香❤プロデューサーくん❤」
「……」

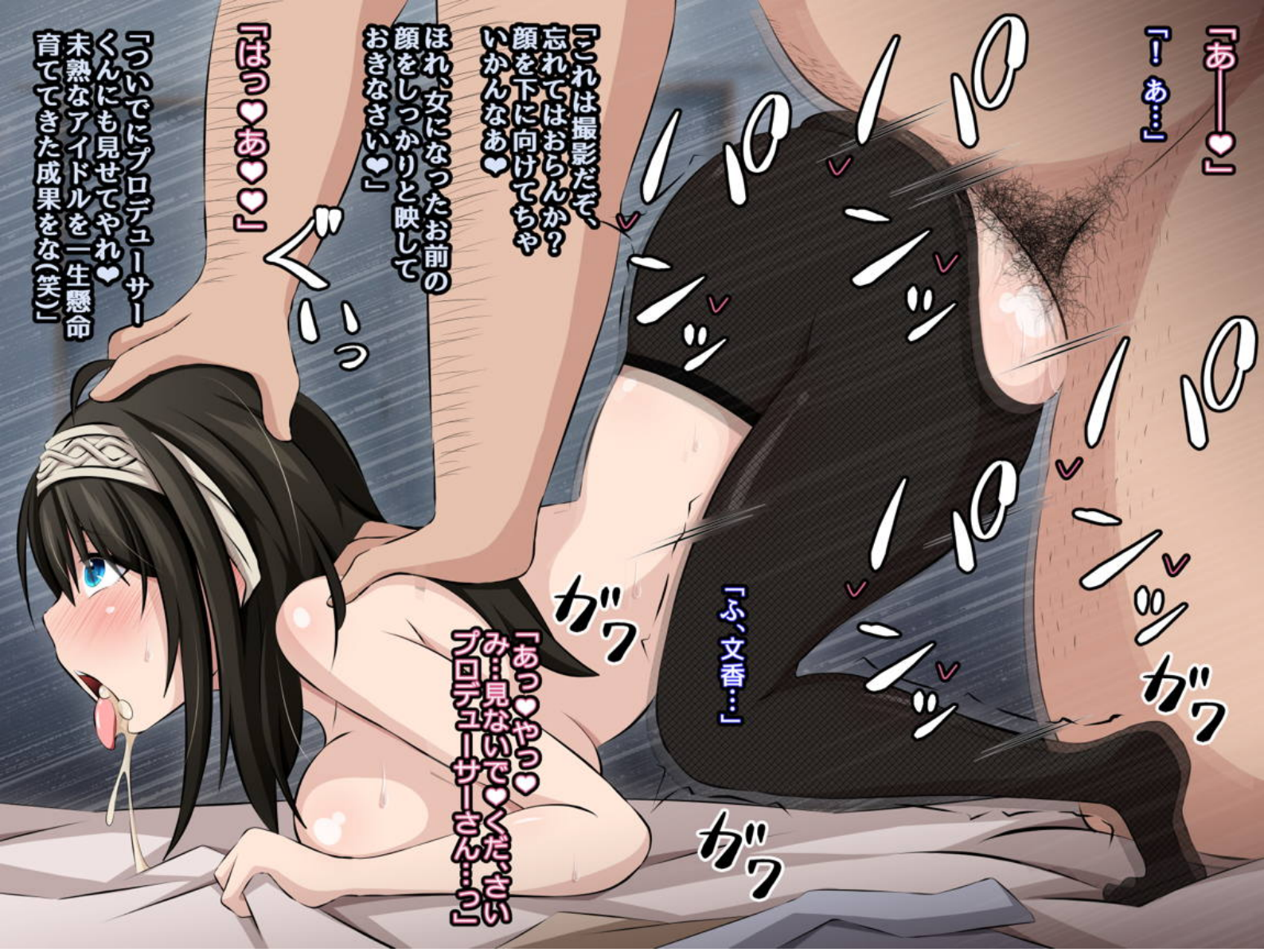
●REC
ちゅぱ
「これこれっ❤そんなに吸いついたら抜けないだろ(笑)」
「名残惜しいのはわかるがそれでは次のシーンにイケないではないか❤」
ぶぶぶぶっ
ぜぜぜぜっ
ぶちゅうう
ひっ
「……え？次のシーン……？」
「当たり前だろ？儂と文香の愛を確かめ合うラブシーンが一回のセックスで終わるわけあるまい❤」

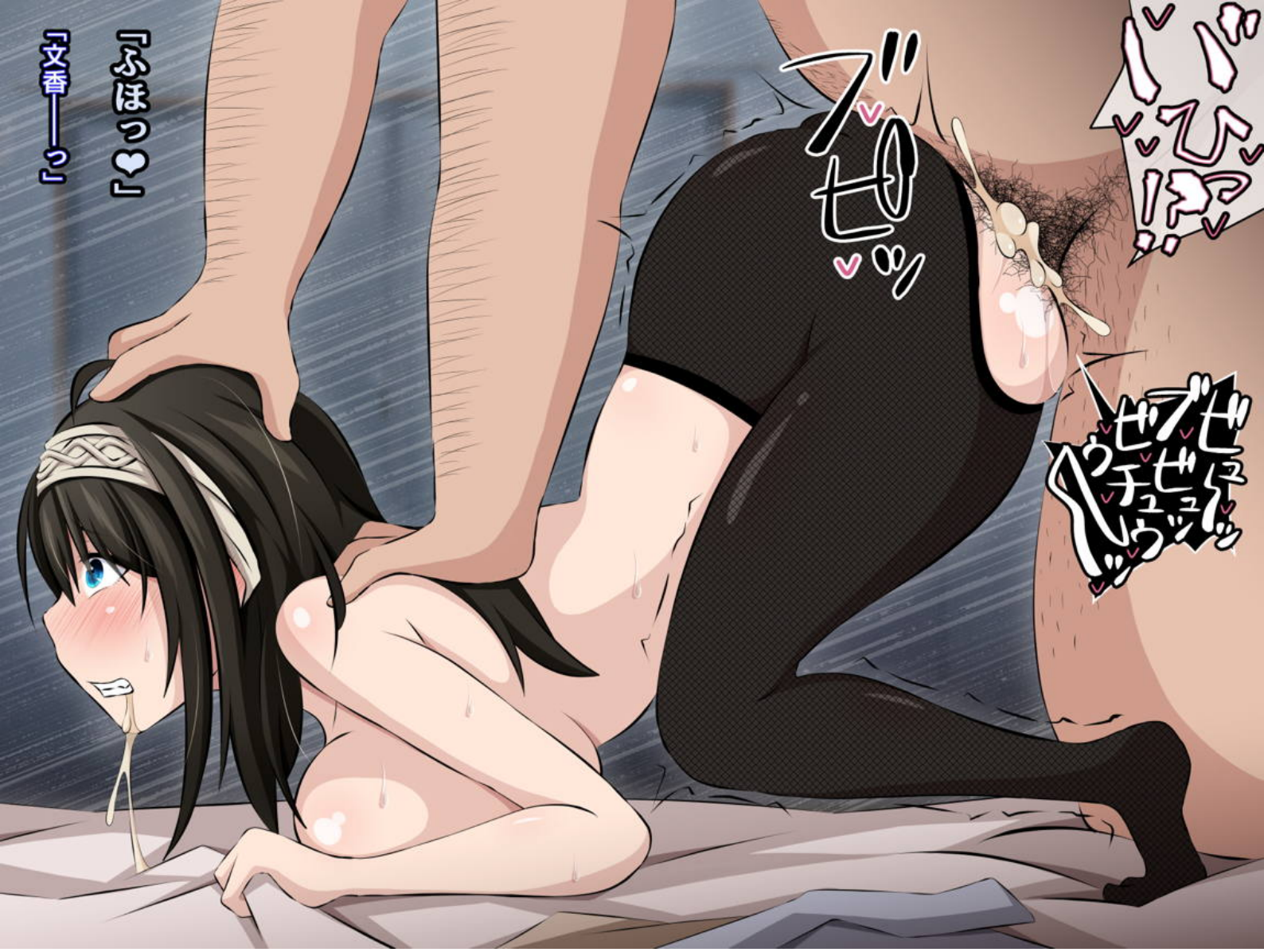
「い、いえ…私は…その、経験がないもので…」
「なんだ、君は童貞だったか。道理で頼りないわけだ(笑)そんなことだから担当アイドルが喰われるんだよ(笑)」
「まあそういうことならこれから文香のことは儂に任せてくれたまえ❤」
「文香ほどの女は君には荷が重いだろう(笑)」
「……」
「おお~こりゃあたくさん射精たなぁ❤優秀優秀…儂の射精量でアイドルとしてのランクが決まるからな(笑)儂は使ったま◎こから自分の精液が溢れるのを見るのが好きでのお❤プロデューサーくん、キミも男ならわかるだろ?」
ズロ
ぼ


「ほれ文香❤きちんとち○ぽ掃除しろよ❤」
「うぶ…❤おぇっ❤」
「女の仕事は抱かれて終わりじゃないぞ❤愛してもらった感謝を込めてお前が汚したおち○ぽ様を綺麗にするんだ❤」
(こ…こいつ…っ文香の処女を奪っておいて…っ!!)
(い、いや…落ち着け…これはドラマの撮影なんだ…文香が頑張ってるのに俺が邪魔をするわけには…)
「ほほ、いいぞいいぞ❤お、お、お…っ❤」

「ふおっ❤」
ブビュッ
えっ!?
（何を勝手な…っ）
ブボ
「しかしヤリ過ぎだ(笑)
あまりに張り切って舐め
回すものだから
少し射精してしまった
ではないか❤」
「よ❤よぉ～しよし❤
合格だ❤
ディープキスの応用が
しっかりできておる❤
性処理道具(アイドル)としての
自覚が出てきたか？
自分の口が歌うため
にあるんじゃないと
わかったようだな」
ドロ
「次のシーンでまた
お前の膣内に射精
する分がな❤
ほらその邪魔くさい服は脱げ」


「はっ♥はっ♥はっ♥はっ♥はっ♥はぁっ♥はぁっ♥」
「イイ女は常に男が楽に犯せる体勢を保つもんだ。どんなにキツくても堪えるんだぞぉ〜♥」
「…いっ♥ふぐ♥あう…うっ♥」
〈くそ…まだ続くのか…っひとつのベッドシーンで一体何回ヤレば気が済むんだ…っ〉
「それと――」
「ふんっ♥ふんっ♥ふんっ♥ふんっ♥」
そうだ文香っ♥そのまま腰を浮かして膝をつけるなよっ♥今の高さが一番突きやすいからなっ」
「は、はいっ♥あっ♥う♥ぐっ♥」
ガッ
ガッ
ガッ


「あ―♥」
「！あ…」
「これは撮影だぞ、忘れてはおらんか？顔を下に向けてちゃいかんなあ♥
ほれ、女になったお前の顔をしっかりと映しておきなさい♥」
「はっ♥あ♥♥」
「ついでにプロデューサーくんにも見せてやれ♥未熟なアイドルを一生懸命育ててきた成果をな（笑）」
「ふ、文香…」
「あっ♥やっ♥み…見ないで♥ください プロデューサーさん…っ」
ぐいっ
ガッ
ガッ
ガッ


ビクッ!?
ブゼッ
ブゼッ
ゼッ
ゼッ
ゼッ
チュウッ
ウッ
「ふほっ♥」
「文香――っ」

「は――っ♥
は――っ♥」

「ふむ、まあ今日は
こんなものか……♥
頑張ったな文香」

「……はっ……はい……♥」

もみ

どろぉ。

「プロデューサーくんも
長い時間ご苦労だったね」

「い、いえ……仕事……
ですから……」

もみ

「いやいや、今日のこと
だけじゃないよ。
こんなに美味しい果実
を饌のために育てて
くれて本当に感謝して
いるよ（笑）」

（なにを……っ
文香はお前のために…
こんなことのために
アイドルになった
わけじゃ――）

「それで次の撮影日
だが――」

「え――!?」

「は――っ♥
は――っ♥」

「ふむ、まあ今日は
こんなものか…♥
頑張ったな文香」

「……は…はい…♥」

もみ

どろぉ。

「いやいや、今日のこと
だけじゃないよ。
こんなに美味しい果実(アイドル)
を儂のために育てて
くれて本当に感謝して
いるよ(笑)」

(なにを……っ
文香はお前のために…
こんなことのために
アイドルになった
わけじゃ――)

「プロデューサーくんも
長い時間ご苦労だったね」

「い、いえ…仕事…
ですから…」

もみ

「それで次の撮影日
だが――」

「え――!?」

「は――っ♥
は――っ♥」
「ふむ、まあ今日は
こんなものか…♥
頑張ったな文香」
「……は…はい…♥」
もみ
どろお。
「いやいや、今日のこと
だけじゃないよ。
こんなに美味しい果実(アイドル)
を儂のために育てて
くれて本当に感謝して
いるよ(笑)」
(なにを……っ
文香はお前のために…
こんなことのために
アイドルになった
わけじゃ――)
「プロデューサーくんも
長い時間ご苦労だったね」
「い、いえ…仕事…
ですから…」
もみ
「それで次の撮影日
だが――」
「え――!?」

「ん？　何を驚いておるドラマの撮影が一日で終わるわけがなかろう？
それに儂は一度口をつけた食事は一気に食い尽くす主義でな❤」
「……」
「文香とのハメ撮り…もとい撮影はまだまだ続けさせてもらうよ❤」もみ
「は…はい わかりました…」もみ
とろお。
「はは、まあそう暗い顔をするな(笑)映像はキミのところにも回してやるから」
「え!? い、いえ、俺は…」
「遠慮するな、ズボンの下で勃起してるのはわかっておるぞ(笑)現役アイドルの生本番無修正動画…童貞のキミには過ぎたオナネタじゃないか」
「……っ」

「ほれ文香、見てみろ…大好きなプロデューサーさん…お前のセックスで勃起してくれてるぞ❤」

「え……？」

「まあ大きく見積もって儂の半分といったところか(笑)アレじゃあ文香はもう満足できないかもしれないな❤」

もみ

どろっ

「な、何を…俺と文香はそんな関係じゃ…」

「……」もみ

「冗談だ、冗談。プロデューサーが担当アイドルに手を出すのは絶対あってはならんことだからな(笑)アイドルを食えるのは権力者の特権だ❤」

「ああ、それから…次からはキミは来なくていいぞ。見せつけプレイがしたいときは改めて呼ぶから(笑)文香の指導は儂に任せておけ❤」

「は、はい。よろしく…お願いします…」

「ほれ文香、見てみろ…大好きなプロデューサーさん…お前のセックスで勃起してくれてるぞ❤」

「え……？」

「まあ大きく見積もって儂の半分といったところか(笑)アレじゃあ文香はもう満足できないかもしれないな❤」

もみ

どろお。

「な、何を…俺と文香はそんな関係じゃ…」

「……」もみ

「冗談だ、冗談。プロデューサーが担当アイドルに手を出すのは絶対あってはならんことだからな(笑)アイドルを食えるのは権力者の特権だ❤」

「ああ、それから…次からはキミは来なくていいぞ。見せつけプレイがしたいときは改めて呼ぶから(笑)文香の指導は儂に任せておけ❤」

「は、はい。よろしく…お願いします…」

「ほれ文香、見てみろ…大好きなプロデューサーさん…お前のセックスで勃起してくれてるぞ♥」
「え……？」
「まあ大きく見積もって饅の半分といったところか(笑)アレじゃあ文香はもう満足できないかもしれないな♥」
もみ
どろっ
「な、何を…俺と文香はそんな関係じゃ…」
「……」もみ
「冗談だ、冗談。プロデューサーが担当アイドルに手を出すのは絶対あってはならんことだからな(笑)アイドルを食えるのは権力者の特権だ♥」
「ああ、それから…次からはキミは来なくていいぞ。見せつけプレイがしたいときは改めて呼ぶから(笑)文香の指導は饅に任せておけ♥」
「は、はい。よろしく…お願いします…」

一週間後――
「ちゅ♥ちゅう～～っ♥」
「よしよし、そうだ♥パイズリのときは尿道に吸いついて精子をおねだり♥きちんと覚えられたな…♥それから次はどうする？」
「んぢゅっ♥」
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ちゅぱ

一週間後――

「ちゅ❤ちゅう～～っ❤」

「よしよし、そうだ❤パイズリのときは尿道に吸いついて精子をおねだり❤きちんと覚えられたな…❤それから次はどうする？」

「んぢゅっ❤」

「おほ❤舌の裏で亀頭舐めときたか❤いいぞぉ❤ぬろっぬろの感触がたまらん…❤よぉし合格点をやろう❤」

ぬっちゃ

ぬっちゃ

ぬっちゃ

「ところでこの水着だがプロデューサーに見せたことはあるのか？」
「いえ、ありません♥ちゅ♥お仕事もあるから海に行こうと言われていたのですが…そのお仕事はキャンセルになってしまったので…」
「そうかそうか、それは残念だったな～（棒）」
（まあその仕事をバラしたのは儂なんだが（笑））
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ

「む、着信か…
誰だ、こんな昼間から…
ああ、文香はそのまま
続けていなさい♥」
プルルル…
「はい、わかりました♥」
着信中…
応答
拒否
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ

「む、着信か…
誰だ、こんな昼間から…
ああ、文香はそのまま
続けていなさい♥」
「はい、わかりました♥」
「仕方のないやつだ…
わかった、手配してやる。
今度は誰がいいんだ？
……なに、高○楓？
ああ、知っとるよ。
……はは、安心しろ、
儂は十代専門だからな」
「もしもし？
ああ、お前か…どうした？
……ああ……
……なに？
……前のは
またか……
どうした？
もう壊したのか？」
「任せておけ。
じゃあいつもの方法で――
――うっ♥」
「んちゅ♥ちゅっ♥」
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ

「うっ♥ふぅ〜〜〜♥」
「ああいや、大丈夫だこっちの…ああそうだ、この前ようやく手に入れてなそういうわけだから邪魔をしてくれるな？
ああわかってるよ、一週間以内には手配してやる。またこっちから連絡するからせいぜい溜めておけ(笑)……ああ、またな」
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ゼドドッ
ゼュゼュッ
ゼゼゼ
ゼュゼュッ

「ふぅ…まったく…」

「おお♥お口あ～んの作法もよくできたな♥またたくさん射精たな♥」

「ああ、儂の甥っ子でな。可愛がっているんだがいつまでも甘えん坊で困ったものだよ。女の世話まで未だに儂がしてやらんと…

……ん？そういえば高○楓も確かお前のプロデューサーが担当だったか？……ひひ、こりゃ面白いことになりそうだ」

「??」

「いや、こっちの話だ。文香は儂の言いなりになることだけを考えていなさい♥それがお前のためなんだからな♥

さしあたり…そうだな今日はソレを飲み込まずに一日過ごしなさい♥仕事中もず～っとだぞ？それが今日の課題だ♥」

「はひい♥わかりまひたぁおじさまぁ♥」

「ありあとぉ…ごらいまふ♥はの…ひまの…♥」

「プロデューサー…
プロデューサー？」
「……」
「プロデューサー！」
「え？
ああ…ごめん楓さん
どうかした？」
「どうかしたんですか、
スマホを見たまま
ぼ～っとしてしまって」
「もしかして
お疲れですか？
ガマンは身体によく
ありませんよ？」
「いや大丈夫、
何でもないよ。
ただ文香のことで
ちょっと…」

「文香さんの……？
あ、さてはプロデューサー
寂しんでしょう。
彼女、最近『特別レッスン』
にかかりきりだから」
「い、いや、寂しいとか
じゃなくて……」
「私は嬉しいですけどね、
プロデューサーを
独り占めできて♥
……ふふ、どうです？
このあと軽くお酒でも…」
「そうしたいんだけど…
まだ仕事が残ってるので。
文香のレッスン記録にも
目を通さなきゃいけないし…」
「最近そればっかり
じゃないですか～
久しぶりに一緒に行き
ましょうよ～
私待ってますよ？」
「いや遅くなりそう
だから…
楽しみはまたの機会
に取っておくよ」
「え～」

「そうだ、それより今度の懇親会だけど…」

「え？……ああ、はい制作会社の関係者さんと…でしたっけ？」

「うん、ぜひ楓さんもって言われてるんだけどどうかな？今度出る番組の会社だし…」

「……ええ、いいですよ。プロデューサーも一緒ですよね？」

「もちろん」

「それなら安心です。もし私が酔い潰れちゃってもプロデューサーが介抱……してくれますよね？」

「うん、心配することないよ。変なことにはならないだろうし…もし万が一楓さんが酔いつぶれちゃっても俺がちゃんと――」

「あれ？」
催眠使用者
：権田金造（仮名）
：権田精二（仮名）に権利譲渡済
催眠対象
：高〇楓および関係者
催眠内容
：懇親会ではアイドルへのお触りＯＫ
：アイドルは勧められたお酒を断れない
：酔い潰れたアイドルはお持ち帰りＯＫ

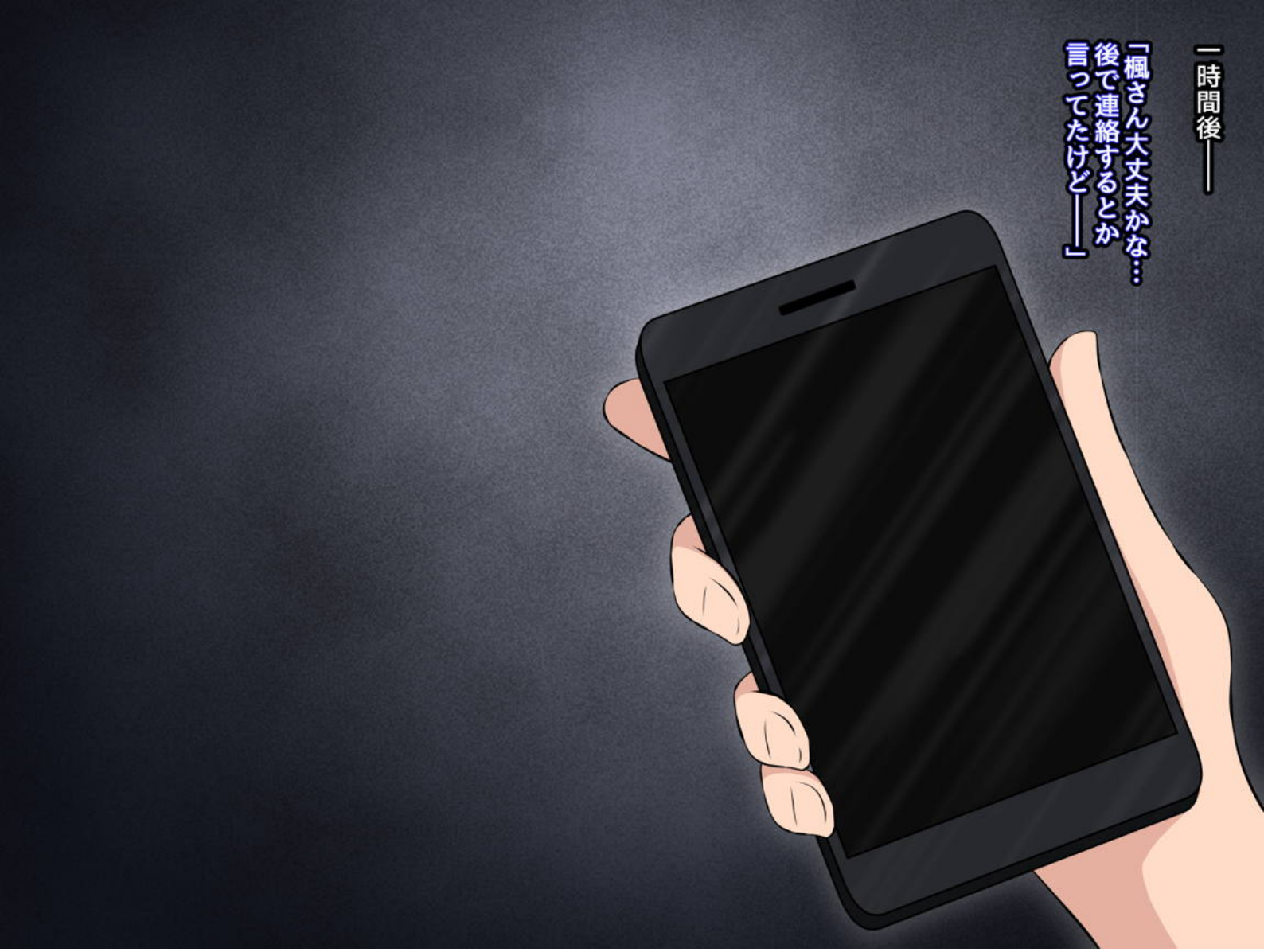
「楓さ～ん身体細いね～❤
さすが元モデルさん❤」
「は、はぁ…」
「でもちゃんとご飯
食べないとダメだよ～
僕もうちょっと肉付き
イイ方が好みだし～❤」
「……ッ」
もみ
もみ
（コイツ…いくら懇親会では
お触りOKだからって初対面
の楓さんに馴れ馴れしく…
それに制作会社の関係者って
聞いてたのに…コイツまだ
学生じゃないのか……？）

『！』
「はい、楓さん
遠慮しないでどんどん飲んで♥
楓さんお酒好きでしょ？」
ぽい
もみ
もみ

「！」
「はい、楓さん遠慮しないでどんどん飲んで♥楓さんお酒好きでしょ？」
「え……で、でも……いまお酒に何か……」
「ちょ、ちょっとあんた……」
「あ～ダメダメ、アイドルはお酒断れないの知ってるでしょ？大丈夫大丈夫、ちょっと睡眠薬とドラッグを混ぜたお薬溶かしただけだから♥」
「ぐ…っ」
「……は、はいいただきます……」
もみ
もみ
ジュアワアアア

「！」
「はい、楓さん遠慮しないでどんどん飲んで♥楓さんお酒好きでしょ？」
「え……で、でも……いまお酒に何か……」
「ちょ、ちょっとあんた……」
「あ～ダメダメ、アイドルはお酒断れないの知ってるでしょ？大丈夫大丈夫、ちょっと睡眠薬とドラッグを混ぜたお薬溶かしただけだから♥」
「ぐ…っ」
「……は、はいいただきます……」
ゴク
ゴク
「んく…っ♥」
「お♥いい呑みっぷりだね～♥さすが楓さん♥」
「ほ～れいっき♥いっき♥」
「ん…っ♥んく♥く…っ♥」
（か、楓さん…っくそ…決まりとはいえあんな酒を飲まなきゃならないなんて……）

はぁ…？？
ズキズキ
「じゃあまだ始まったばっかりだけど懇親会はもうお開きにしようか。楓さんは僕が責任もって連れて帰るね❤」
「あれれ～？たった一杯で潰れちゃった？お酒弱いんだね～楓さん(笑)」
「……ッ」
「はは、もうふらふら❤これじゃあ一人じゃ帰れないしお持ち帰りされても仕方ないね❤ね？プロデューサーさん」
「い、いや…しかし…それなら俺が――」
「い、いや…っ」
「遠慮しないで～プロデューサーがアイドルをお持ち帰りなんてマズいでしょ？大丈夫大丈夫変なコトしたりしないし後でちゃんと連絡もするからさ❤」
「あぅ❤やぁ…❤ぷ…❤ぷろぉりゅ…さぁ…❤」


一時間後――
「楓さん大丈夫かな…
後で連絡するとか
言ってたけど――」

一時間後――
「楓さん大丈夫かな…
後で連絡するとか
言ってたけど――」
「！ きた…
……え？
ビデオ通話…？」
プルル…
ビデオ通話
着信中…
応答
拒否

一時間後――

「楓さん大丈夫かな…
後で連絡するとか
言ってたけど――」

「！　きた…
……え？
ビデオ通話…？」

パッ

「……
もしもし――」

ガチャ

『おほっ♥綺麗なま○こ♥お薬でとろっとろになってるね～♥ひひ、美味そ～♥』
「な……!?」
ぐぃ
ヌぷっ
トロ～
「か……楓さん……っ!?」
『ところで楓さん途中で寝ちゃったから僕が運んだんだけど楓さん軽すぎない？もうちょっと食べさせて体力つけないとこれから大変だよ～』
『……あ、もしもしプロデューサー？ちゃんと映ってるかな？無事に楓さんを連れ帰れたので約束通り連絡しました～♥場所は都内のホテルで～す♥』
『ん…ふぅ……♥』
スヤ～ スヤ～
「ちょっと…これはどういう――」
『…さて！それじゃあさっそく始めますか♥』

「始めるって…!!何をするつもりですか!!ヘンなことはしないって約束じゃ――」
ボロン
「そ、それはそうですが…」
『じゃ本人に聞いてみる？お～い楓さ～ん？このままち○ぽ入れちゃってもいいよね～？』
『……』
『何って、こんなご馳走前にしてやることなんてひとつでしょ❤
同じ部屋に泊まる男女がセックスするのは別にヘンなことじゃないし～(笑)
それにプロデューサーだって知ってるでしょ？お持ち帰りされちゃったアイドルは何されても文句は言えないんだよ❤』
『返事しないとOKってことだよ～？いいのかな～？セックスしちゃうよ～？』
「か、楓さん――!!」
『……ん……』

『はい時間切れ～っ♥♥』
ズ
ブ
ブチブチブチブチ
あっ
「あう…」

『おっ…❤へ？あれ？ぷちぷちっと膜を破るこの感触…っ❤❤もしかして楓さん処女だった？(笑)』

「ぐ……っ」

『あ、誤解しないでよ、これレイプじゃないからね～？ちゃんとヤる前に確認したし』

みぢ…

『正規の手順を踏んで担当プロデューサーにも見てもらってる完全合意の上の公認セックスなんだから❤ね～そうだよね～？プロデューサー』

「……」

「……は、はい…」

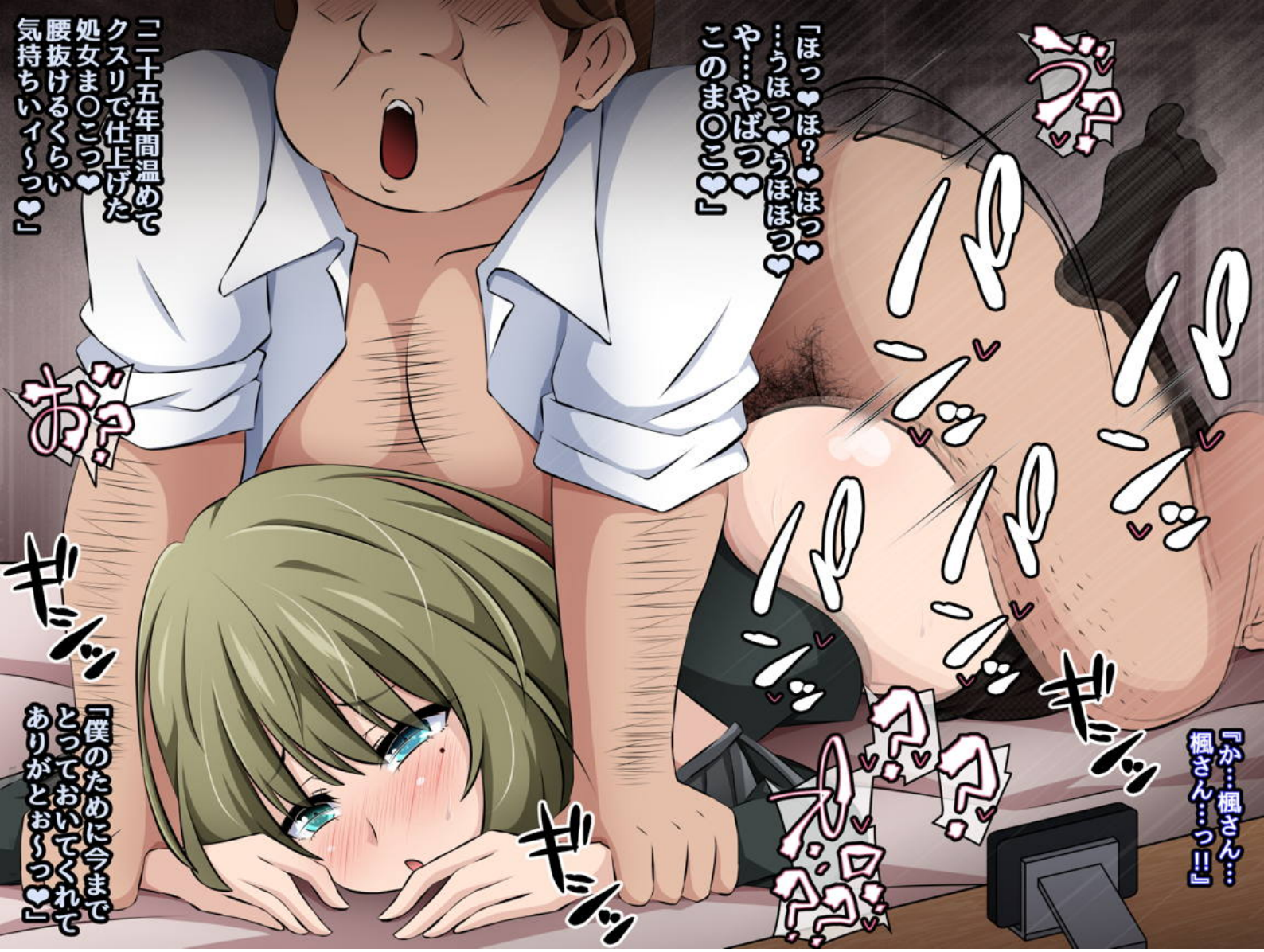
『よかった～❤じゃあ…か・え・で・さん❤プロデューサーにしっかり見てもらおうね！僕たちがい～っぱい愛し合うところ❤』

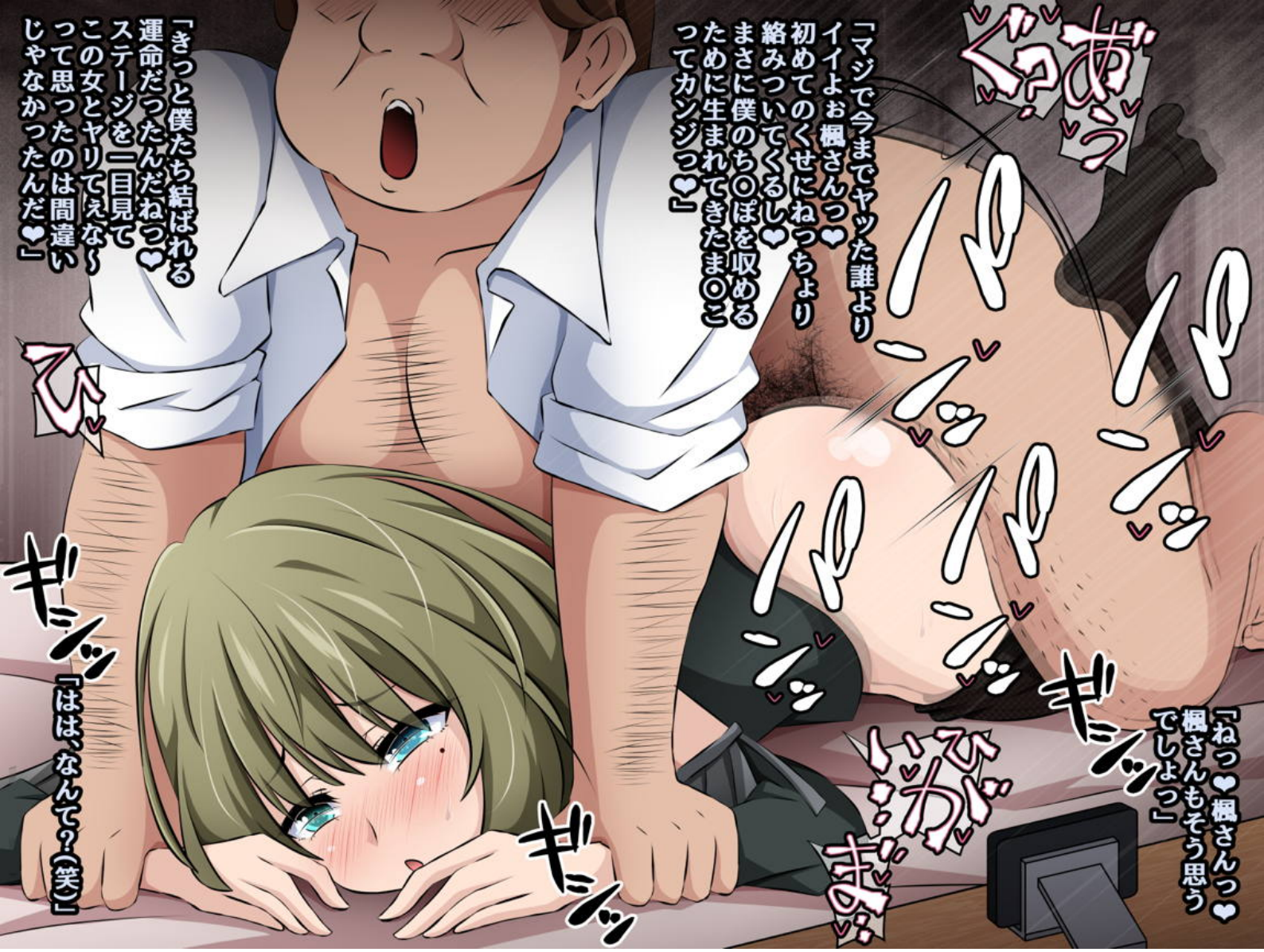
『嘘でしょラッキー❤二十五歳だしさすがに経験くらいあるかと思ってたけど…てかプロデューサーとは一回もしてないんだ(笑)』

ごめ～んプロデューサー楓さんのバージン思いがけず頂いちゃった～❤』

バッ!!

ぶる…

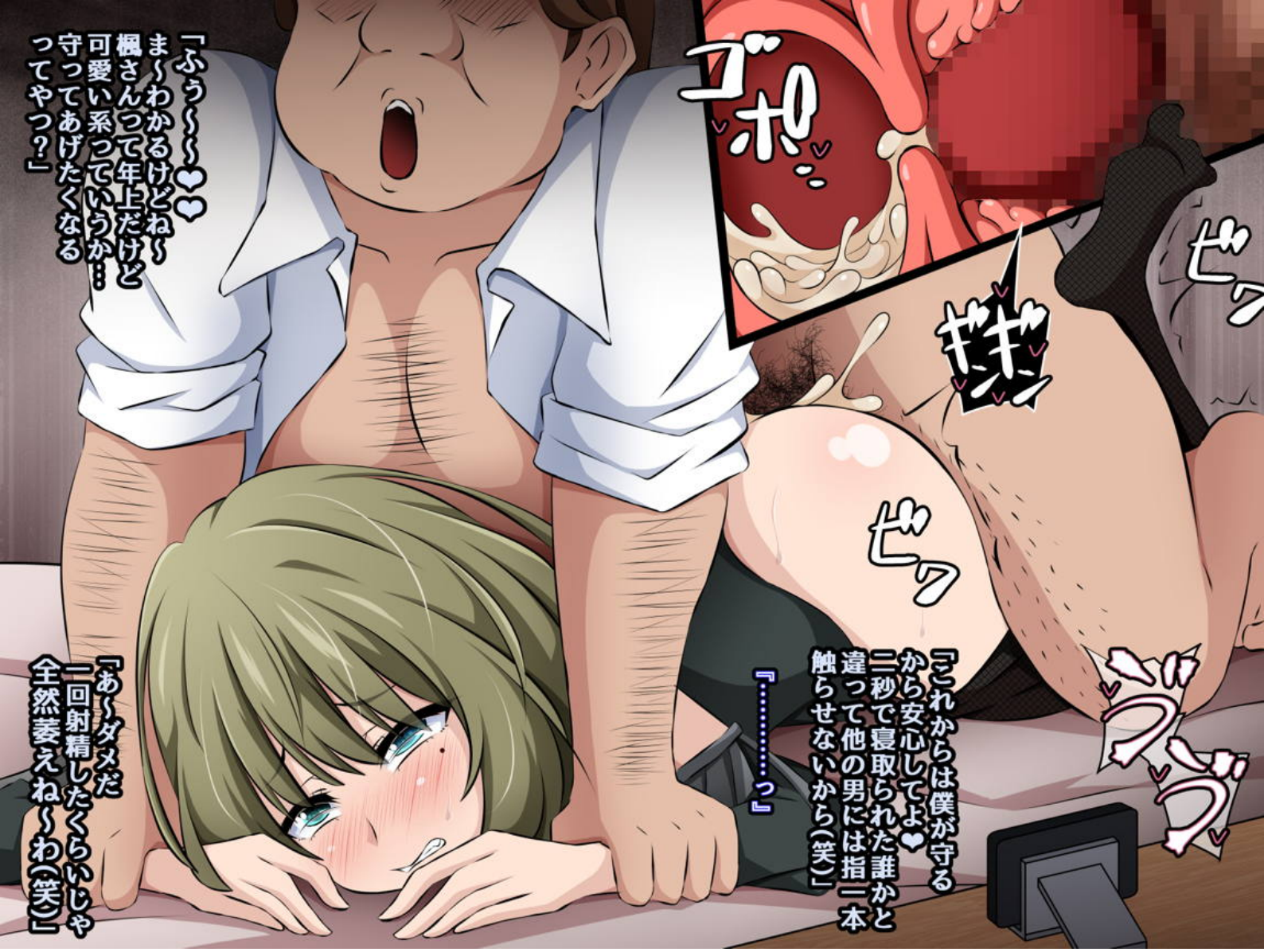

『か…楓さん…楓さん…っ!!』
「ほっ❤ほ?❤ほっ❤…うほっ❤うほほっ❤や…やばっ❤このま〇こ❤」
「二十五年間温めてクスリで仕上げた処女ま〇こっ❤腰抜けるくらい気持ちいィ〜っ❤」
「僕のために今までとっておいてくれてありがとお〜っ❤」
ビッ
ビッ
ビッ


「ねっ❤楓さんっ❤楓さんもそう思うでしょっ」
ぐっ
ぁぁっ
ぎぃぃっ
ぎぃぃっ
ぎぃぃ

『し、しかし楓さんは…』
「本人もイイってさ❤ね～楓さん？」
「…あ～やべ❤楓さんのために一週間も溜めて来たからもう射精そう❤」
プロデュ～サ～もちろん膣内射精はOKだよね～？」
「いいから『はい』って言って！」
『い、いや、それはさすがに…っ』
「え～なんで～？楓さんのおま◎こは大歓迎だって言ってるよ？」
「は～いご本人の許可いただきました～❤膣内射精しま～す❤」
『ちょ――』

「あ❤あ❤あ❤
き❤気持ち い～❤❤
高○楓に種付けっ❤❤
最高お～❤❤」
ビク
ドドド

ビチャ
ビチャ
ビチャ
ブチュウッウウ
ビク
ビク
あっ
あっ
あっ
『し…しかし…もし妊娠したりしたら…』
「へーきへーき、そう簡単には孕まないよたぶん(笑)」
「あ～射精る❤ビチャ
まだ射精るっ❤
年上アイドルの子宮
汚す精子止まらね～❤」
『か…楓さん…っ!!』
「だ～いじょうぶだって
プロデューサーは心配性
だなぁ～
楓さんは大人なんだから
さ～❤」


「ふう〜〜〜♥♥
ま〜わかるけどね〜
楓さんって年上だけど
可愛い系っていうか…
守ってあげたくなる
ってやつ？」
「あ〜ダメだ
二回射精したくらいじゃ
全然萎えね〜わ(笑)」
「これからは僕が守る
から安心してよ♥
二秒で寝取られた誰かと
違って他の男には指一本
触らせないから(笑)」
『……っ』
ゴポ
ギンギン
ビク
ビク
ビクビク

「ほらキスっ❤キスしよっ楓さんっ❤んぶちゅっ❤べろっ❤」
ぶちゅっ
「ん～ダメダメ❤そんな弱～い力でイヤイヤしても勝てないよっ❤
ほら舌を絡ませて～ベロベロベロぉ❤」
ぴちゃぴちゃ
ベロベロ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ワワ
ブチュウウ
ギシッ
ギシッ
ギシッ
「そうそうっ❤楓さんは僕のいうコトきくしかないんだからねぇ❤ひひっ❤キスもこれが初めてだったりして❤❤」

「ぶふふふっ❤
一生懸命子宮で
吸いついちゃって❤
ホントかわいいなぁっ
楓さんは…決めたっ❤
もう結婚するっ❤
今まで色んなアイドル
で遊んできたけど
楓さんは別だよっ❤
こんな相性イイま○こ
初めてだしっ❤
楓さんもそうだよねっ」
「今繋がってるのは
プロデューサー
じゃなくて僕
なんだよっ❤
ほら素直になって
〜っ❤」
チュウウ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
たぱ
たぱ
ブチュウウ
ワワッ
ギシッ
ギシッ
ガクガクッ
ちゅぱっ
おっ
ビクッ
ビクッ

ブチュウウッ
ハモッ!?
「あ～また射精るっ❤誓いの膣内射精い❤プロポーズ精子で子宮いっぱいにしちゃうよ～っ❤」
ヒチャ
ヒチャ
ブ
ビュ～ッ
ビュビュドドッ
ビュビュビュビュッ
「僕のもんだっ❤これで楓さんは僕のもんだからな～っ❤❤」

「お❤おほ❤吸いつく～っ❤」
ほぉぉぉ
むちゅうう
ズズ…
おぉ
「ひひひっ❤駄目だよぉ～楓さん❤名残惜しいのはわかるけどそんなに吸いつかれたらぁ…」

ボンッ
ブチュウッ
ドピュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
「もう一発射精したくなっちゃうよっ❤❤」

「ぶふぅ～っ❤
楓さんの初物ま○こ
ごちそうさま～っ❤」
ずぼっ
ズハウ
「最高に美味しかったよ～
思わずプロポーズ
しちゃったもん(笑)
僕の精子を子宮で受け止めて
くれたってことは返事は○K
ってことだよね❤」
ぱぴぷぺぽ
ゴポ
ドロロ～
ぜワ
ぜワ
ぜワ
「か、楓さん……っ」

「あ、プロデューサー電話まだ繋がってたんだ(笑)ちょうど良かった僕たち結婚しました〜❤ほら、楓さんもピース(笑)」
ぴすぴす
「ほら❤楓さんも僕と結婚したいってさ(笑)」
「……ぐ…し、しかし…」
ゴボ
ドロロ〜
ぜワ
ぜワ
ぜワ
ズハウ
「そ、そんな勝手な…」
「何言ってるの？セックスは子作りが目的なんだからさ〜❤赤ちゃんを作る二人が結婚するのは自然なことでしょ？ね〜楓さん❤」
あひぃ

「あ～わかった、仕事の心配？」
「い、いや…」
「それしかないよね、プロデューサーと楓さんは付き合ってるわけでもないビジネス上の関係だったんだから(笑)」
「……っ」
ズハウ
ゴボ
ビク
「……は、はい…わ…わかりました…」
「でも先のコトはわからないなぁ～(笑)もしデキちゃったら引退するしかないかも…まあそれはおいおい考えていってよ❤それがキミの仕事でしょ(笑)」
ドロロ～
ビク
「仕事なら心配いらないよ、結婚してもしばらくは続けさせてあげるから。ただ僕とのデートの方が優先ってだけ❤当然だよね～？いくらアイドルでも仕事なんかより夫婦の時間の方が大切だもん❤」
「……」
「僕はただ自分のお嫁さんと愛を育んでいくだけだから❤」
ビク

「じゃあそういうわけで…これからよろしくね、か・え・で♥」
はぁ…
ズハウ
ゴポ
ドロロ～
ビク
ビク
ビク
「あ、ついでにプロデューサーもね～色々迷惑かけると思うから(笑)」

「……楓さん…」

それを最後に電話は
一方的に切られた…

なぜだろう…
楓さんがあの男と結婚する
ことになったのは
ごく自然な流れなのに…

なぜか不安が心をよぎる…
文香のときにも感じた…
なにか取り返しのつかない
ことが進んでいるような――

それからも――
「んっ♥ちゅっ♥ずちゅるっ♥」
ぶっちゅ
ぶっちゅ
ぶっちゅ
ずずずちゅっ
ぶっちゅ
「あ～楓の喉ま○こ気持ちいィ～っ♥」
ブブチュ

「あ、あの…ステージ開演までもう時間が…」
「あ～いいでしょ別にファンの連中なんか待たせておけば(笑)」
ぶっちゅ
ぶっちゅ
ぶっちゅ
ぶっちゅ
ぶっちゅ
「楓はファンじゃなくて僕のモンなんだから♥ね～楓♥」
「んぷっ♥ちゅず♥♥」
「ひひ、そーそー ち◎ぽしゃぶるときは股広げてオナニーしながらね♥楓さんってば大人のくせに僕が教えるまでこんな常識も知らないんだから～(笑)」
「……」

「アイドルの喉扶るの最高お❤
ごめんね～大事な商売道具
ち○ぽしごくのに使って(笑)
これから歌うのにねぇ～❤」

「えぐっ❤えぎゅ❤❤」

ぶっちゅ

ぐぽっぐぽっ

ちゅっちゅっ

「にしても…ぶふっ❤
ファンも思わない
だろうな～」

「でも楓が悪いんだよ？
可愛らしいステージ衣装で僕の
ち○ぽ挑発しちゃってさぁ…っ❤
ホントは楓も欲しかったんでしょ？
僕の…っ❤う❤せ・い・し…っ❤」

ブッチュ

ぶっちゅ

「まさかステージ
開始直前に高○楓が
ち○ぽしゃぶりながら
がに股オナニー
してるなんて(笑)」

ドゼュッ
ゼュハハして
『うっ♥』
えぼっ
ブビビ
ウチュュュ
ウッッッ
ビク
ビク
ビク
ブシャッ

「んぐ♥ん…っ♥ぐぎゅっ♥」
ビビビビ
チュウ
チュウ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
「ふほ♥お♥よしよしっ♥」
排泄された精液は全部胃に落として～
潮吹きもキメられてカンペキだねぇ～♥」
「あ～やば…♥優越感やば～…っ♥この射精すげ～きもち～♥」
ブシャッ
「ファンの皆ごめんね～♥君たちが憧れてる楓は僕の言いなり肉便器で～す♥」
「……」
ビクッ

『あ～すっきり♥
それじゃ楓、
ステージ頑張ってね～』
げぼ
メカぅ…
とろ～
『んぷ♥はぁ…
はぁ…♥♥』
『……』
ベトっ
ビク
ビク
ビク
ブシャッ

「ぷ♥ぷろでゅーさー…それじゃあ……♥♥」
「か、楓さん…開演は少し遅らせよう。少し休憩した方が――」
とろ～
メカウ…
ベトー
「あ～ダメダメ♥せっかくだからマーキング直後の楓をファンに見てもらわなきゃ(笑)」
「し、しかし…」
ビク
「わたしならだ…大丈夫♥です…っ♥」
「ほら(笑)じゃ～レッツゴ～あ、衣装もそのままエロ染みつけたままノーパンでね♥」
ブシャッ
「帰ってきたらご褒美もあげるから♥頑張って～」
「は、はひぃ…♥」ビク
「……」

文香も――

「ほれ文香…足を上げなさい♥プロデューサーにも見えるようにな(笑)」

ぜーん

「はい、おじさま♥」

むちっ

「ほほ♥ほれ見たまえプロデューサー…文香の身体、柔らかくなったと思わんか？これも儂との個人レッスンの成果だよ♥」

ヒクヒク

とろ…

「は、はい…ありがとうございます…」

「いやいや、礼には及ばんよ(笑)その分儂もイイ思いをしてるからな♥」

「そ…それでこれは…？もうすぐステージの時間なんですが…」
「ああ、そうだったな（笑）しかし儂のレッスンの方も今日は特別でね…❤なあに、すぐに済むよ」
ぜーン
むちっ
「あの…おじさま？セックスするんじゃないんですか？」
ヒクヒク
とろ…
「ははっ、いやいや…ソレはまだおあずけだ❤期待で濡らしとるところ悪いが（笑）今日はなぁ――」

「文香…これをケツ穴に入れながらステージに立ちなさい♥」
「な――」
「あ……♥♥」
ビキィ
「そ、そんなものが入るわけ――い、いや、そもそも…」
「心配するな(笑)ローションはたっぷりつけてるから♥」
「それにこれも文香のスキルアップのためのレッスンなんだぞ♥」
「し、しかし――」

「だ…大丈夫です
プロデューサーさん♥
私…ヤレますから…♥」
「ふ、文香――」
ビキィ
「よしよし、よく言った♥
さすが儂の文香♥」
「よぉし、そうと決まれば
腹の奥まで思いっきり
ねじ込んでやるからな♥
覚悟しろよ～文香♥」
「は、はい…っ♥」

「ほれいくぞぉ～」
「は…っ♥」
ぜっ…
ぜっ
「さ～ん…
にい～…
いい～ち…」
「あ―」

ボッ!?
ズブ
ズブ
ブチッ

おっ!?
ガク
ガク
ズブ
ズブ
ブチッ
ギチィ
ガク
「あ♥が……っ!?♥」
「ん～どうした～？まだ半分しか入ってないぞお～(笑)ほれ力を抜かんか♥」

おぉぉっ♡おぼっ♡
「ほほ、こりゃあ面白いっ♡ケツ穴から腸液がドバドバ溢れてきおる♡ローションはいらなかったな(笑)」
ズッポ
ズッポ
ブゼ
ブシュッ
ズッポ
ズッポ
「括約筋に全神経を集中させろ♡何度も排泄してるようで気持ちイイだろ？頑張らんか♡儂のち○ぽはこんなもんじゃないぞ♡」
おんっ♡おんっ♡

「ひひひ♥ファンに申し訳ないと思わんのか？待たせておいて自分はケツ穴ほじられてよがり倒しおって♥」
ぺっぺっ
ズッポ
ズッポ
「アイドルがケツ穴からこんな下品な音を出していいと思ってるのかっ♥」
ずぽっ
ずぽっ
ズッポ
ズッポ
ぶぜ
ぶぜ
「……っ」

はぁぁぁぁっ
『よし、全部飲み込んだな❤
見たかプロデューサー？
ちゃんと入っただろ(笑)』
「ふ、文香…っ」
ゼワ
ゼワ
ズズズウッ
ゼワ
ブチュウッ
ブシャアッ
『まったく、潮まで噴いて
悦びおって…
とんだマゾアイドル
だな文香は❤』

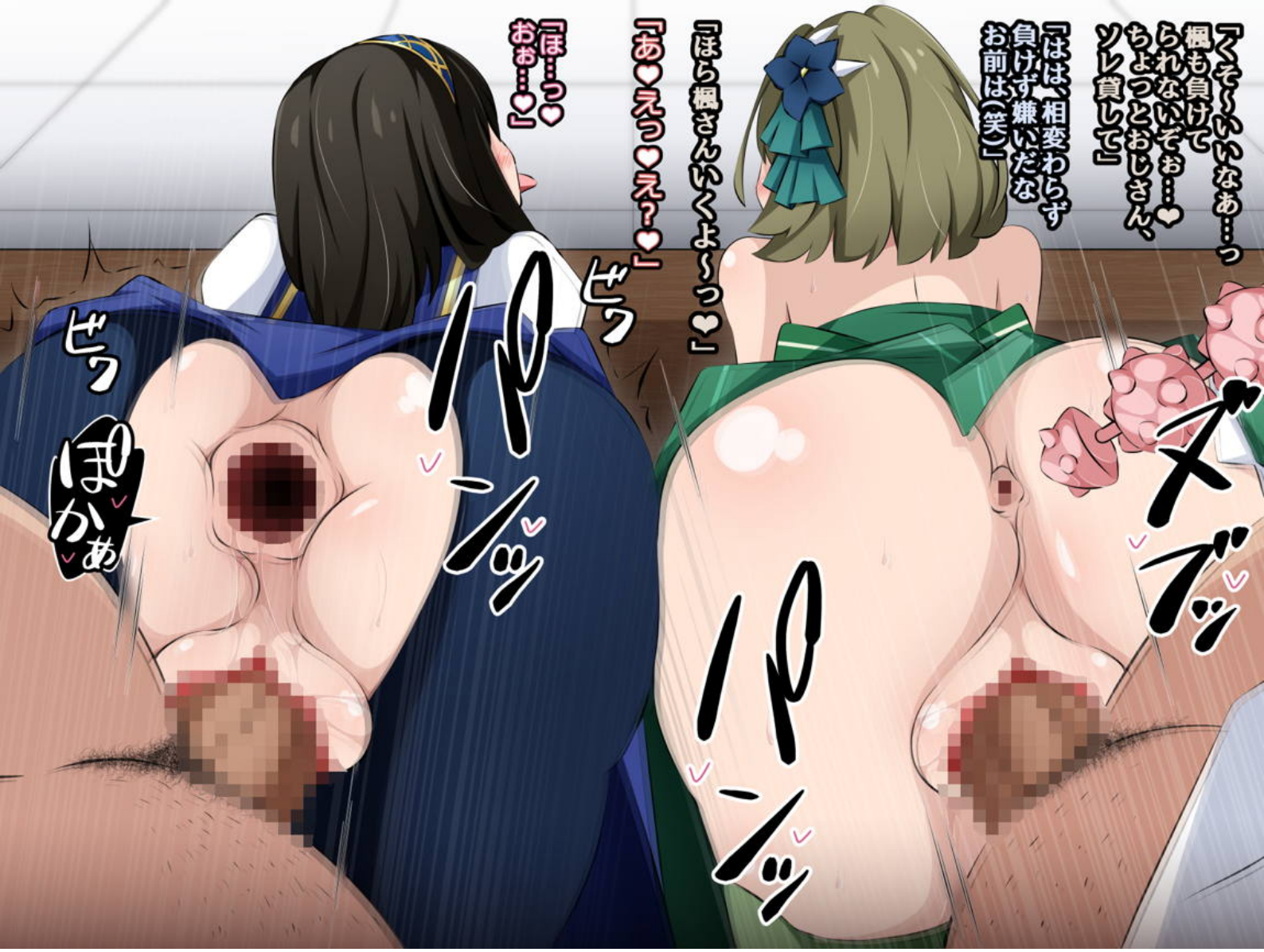
「はぁ―…っ♥
はぁ―…っ♥
お、おじさまぁ…っ♥」
「わかっとるわかっとる♥
ご褒美なら後でやるからな」
ゼワ
ゼワ
ギチギチ
ミチィ
「今はステージだろ？
これ以上待たせるのも
ファンが可哀想だ(笑)」
「ぐ……ふ、
文香……っ」
トロ♡
ブシャアッ
ゼワ
「よしよし♥
それじゃあ頑張って
きなさい♥
踊ってる途中に
いきんでひり出さんよう
気をつけるんだぞ(笑)」
「は…はぁ～い♥」

ときには二人同時に――
「あっ♥あっ♥あっ♥」
「ひひっ♥ゃ♥ヤバッ♥ステージ直後の楓ま○こ超気持ちいいよ♥おじさんっ」
パンッ
パンッ
「はぁっ♥はぁっ♥ん♥ふぅっ♥」
「そうだろ？ちょっと躾けたアイドルはステージの緊張でま○こを濡らすようになるからな♥
ファンが楽しんどるあのステージは前戯代わりというわけだ(笑)」
ブリ
ブリ
パンッ
パンッ
「なぁプロデューサーくん♥」
「……」

「文香♥特大アナルビーズを入れながらのステージは興奮しただろ？ケツ穴にこんな凶悪なモノ隠しながら平気で踊りおって♥」
「ほれ正直に言いなさい♥」
「あっ♥あっ♥はひいっ♥」
「興奮しましたっ♥前戯代わりのステージ最高でしたあっ♥」
「はは、だろうな♥ヒドい出来だったぞ(笑)」
「楓っ♥楓はっ？♥楓も全然集中してなかったよねっ♥」
(二人とも…確かに集中力を欠いたステージだった…
……でも仕方ないよな…こんな状況じゃ…)
「すみ♥ませんっ♥精液の匂いとっ♥『ご褒美』のことで頭がいっぱいでっ♥」
「私もっ♥ケツ穴にばかり集中してててぇっ♥」
「ステージのことなんかぜんっぜん考えてませんでしたあっ♥」

「ははは、それでいいんだ♥ステージなんか流してやれなきゃ一流にはなれないからな(笑)よぉ~し、頑張った文香にもご褒美をやろう♥」
パンッ
パンッ
「あ♥は♥な、ナニ!を…っ♥」
「わかってるだろ?嬉しそうにヒクつかせおって…っ♥」
「あ―♥」
ヒクヒク

「はは、それでいいんだ♥ステージなんか流してやれなきゃ一流にはなれないからな(笑)」
よぉ～し、頑張った文香にもご褒美をやろう♥」
「あ♥は♥な、ナニ!を…っ♥」
「わかってるだろ?嬉しそうにヒクつかせおって…っ♥」
「あ―♥」
パンッ
パンッ
パンッ
おぉぉ!?
ズルッ
「ひっひっひ♥ステージよりよっぽど声がでてるじゃないか(笑)」


「くそ～いいなぁ…っ楓も負けてられないぞぉ…♥ちょっとおじさん、ソレ貸して」
「はは、相変わらず負けず嫌いだなお前は(笑)」
「ほら楓さんいくよ～っ♥」
「あ♥えっ♥え？♥」
「ほ…っ♥おぉ…♥」
ズブッ
パンッ
パンッ
ビクッ
ビクッ
ぽかぁ

「くそ～いいなぁ…っ楓も負けてられないぞぉ…❤ちょっとおじさんソレ貸して」

「はは、相変わらず負けず嫌いだなお前は(笑)」

「ほら楓さんいくよ～っ❤」

「あ❤えっ❤え？❤」

ズブッ

ぎゅうぅぅっ

「あぁ??❤うぐ…!?❤❤」

「おっ❤ほぉっ❤」

「おぉ、さすがだな根元まで一気にずっぷり飲み込むとは❤文香でもひと息では無理だったぞ❤」

(は❤ぁぁ…っ❤さっきまで文香さんのアナルに入っていたモノが私の中に…❤)

「あっ❤コレやばいっ❤」

「膣奥締まってぇ…っ❤し❤絞られるぅっ❤」

ビクッ

ぼかぁ

ビクッ

ぎぎぎぎぎぎぎぎ

ぁぁぁっ
「おっ♥射精るっ♥射精るうっ♥」
ビクッ
みぢ
ドッ
ビチュウッ
「種付けっ♥ビクッ十分前までファンの前で踊ってた高○楓に種付けぇっ♥」ビクッ
パンッ
「ひひ♥気持ちよさそうに射精しおって♥ほれ文香こっちもイクぞ♥」
「は♥はい――」
ビクッ
ぼかぁ
パンッ

ぁぁぁっ
「おっ♥射精るっ♥射精るぅっ♥」
ビクビク
みぢ
「ひっひっひ♥すっかり膣内射精でイク癖がついたなぁ文香♥」
「種付けっ♥十分前までファンの前で踊ってた高○楓に種付けぇっ♥」
ビクビク
ドクッ
ビュルッ
ビュルビュルビュルッ
「ひひ♥気持ちよさそうに射精しおって♥ほれ文香こっちもイクぞ♥」
「は♥はいー♥」
びくっ
ビクッ
ぼかぁ
「子宮口が吸いついてきて離れんわ♥」

「あ～やべぇ～小便みたいに射精るわぁ～♥」
「他の雄には渡さないっていう男の本能だろうな♥それもステージ終わりのセックスの醍醐味だ♥」
みちぶ
ドクッ
「は、はい…わかりました…」
（こんな……応援してくれてるファンの気持ちを蔑ろにするような……い、いや……しかしこの人たちの行動は全て二人のためなんだ…）
ぶるっ
「ところで一発で終わりじゃなかろうな？」
「もちろん♥ね～二人とも♥」
「な――」
はらっ…っ
ビクッ
ゼュッ
「あ～プロデューサーくんステージの予定は全て教えてくれたまえよ♥」
「俺も俺も♥アイドルに種付けしてる感が倍増で最高だわコレ♥すっかりハマっちゃったよ～」
ぼかぁ
「あ♥」
「は♥」
「はひい…っ♥」

「う～む♥やはり文香にはステージ用のドレスなんかより下品なエロ衣装がよく似合うな♥」
「……そんなこと……」
「ち○ぽもしっかり根元まで咥え込んで♥偉いぞお文香♥」
「ありがとうございますおじさまっ♥全ておじさまのご指導のおかげです♥」
「そのお礼に――文香のおじさま専用スペシャルステージ♥」
「淫乱バニーのアナルファックダンス♥を存分にお楽しみくださいっ♥」
ブリ
ブリ
ぽっ
ドロ
ズッ
ズリ

「ほほ❤農専用とは嬉しいことを言ってくれる❤アナル拡張したかいがあったわい❤」
「……」
「括約筋で思いっきりち○ぽを食いしばりながら本気でピストンするんだ❤」
「しかし文香？さっきまでのステージと違ってダンスに集中するのはいいが…肝心のケツ穴が疎かになってはいかんぞ？」
「下品で汚い音を部屋中に響かせろ❤わかったな？」
「あ…は、はいっ❤わかりましたぁ❤」
フリ
フリ
ぽこ
ドロ
ズッ
ズリ

ほっ!!
「あ…あっ♥おっ♥おっ♥おっ♥おんっ♥」
ひょん
ひょん
「お♥ほほぉ♥」
「い…っ♥いかがですかおじさまぁっ♥文香のアナルッ♥ご満足いただけてるでしょうかっ♥」
「うむ、いいぞお♥やはり飲み込みが早いな文香は♥」
ブッポ
ブッポ
ブッポ
ブッポ
ブッポ
「そのままケツ穴をダメにするつもりで続けなさい♥」
「なあに安心しろ♥括約筋が役立たずになってオムツ生活になってもきっとプロデューサーが面倒を見てくれるから(笑)」
「え……?」

「それよりお前はどうなんだ？前に教えただろセックスは互いが気持ちよくなければならないんだぞ♥」
「は♥はいっ♥もちろんっ♥私も気持ちいいですっ♥」
ひょん
ひょん
「あっ♥あっ♥すみません……っ♥おじさまのぶっとい♥ち○ぽが文香のケツ穴に出たり入ったりしてっ♥」
「おじさまのモノが出たり入ったりして何度もっ♥その…用を足してるようで――」
「何度もクソをひり出してるようで超気持ちイイですっ♥ケツ穴交尾最高っ♥」
「おいおい文香…こういうときはもっと下品な言葉を使いなさい♥これも何度も教えただろ？これだけは覚えが悪いなお前は…」
「ふ、文香……」

「ひひひっ❤聞いたかね プロデューサー❤ あの文香がここまで 下品な言葉を覚えたんだぞっ❤ 全部儂が教えたんだ❤」
ひょん
ひょん
「わかっとるわかっとる(笑) 誰にも漏らしたりせんよ… 文香は儂だけのモノ だからなぁ…っ❤」
「あ〜 ステージに来ていた ファンの連中にも 見せてやりたいわ―」
「やつらの大好きな 鷺〇文香が儂の上で 跳ね回っとる姿…っ❤」
「あっ❤あっ❤」
「ちょ、ちょっと―」
「も、モノって… 文香は誰のモノ でも―」
「あ〜でる…射精るぞぉ…❤ 儂の文香の…っ❤ ひひ❤直腸にい…っ❤」

おっおっ!!おお
ビク
ブシャッ
「直射精だっ♥♥」
「……!!」
ビク
ビク
ブビュルルッ

「おっ♥ほぉおお…っ♥」
「ほほほぉっ♥アナルに射精された瞬間に潮吹いてイキおったぁ♥」
ビクッ
ブシャッ
ビクッ
ビクッ
ビュルルルッ
ブピュッ
「本っ当に肉便器の素質しかないな文香には…♥キミも担当Pとして誇らしいだろ(笑)」
「……」
「ほれ文香…可愛いイキ顔を儂に見せてくれ♥ついでにプロデューサーにもな(笑)」

「えへ❤あへぇえ…❤」
「よしよし…❤ほれ見てやってくれこのメス顔…❤こんな表情もできるようになったんだ❤キミが出会った頃からは想像できないだろ？」
ブシャッ
「……文香…」
「これほど調教しがいのあるアイドルは儂も初めてだよ❤見つけてきてくれた君には感謝しかないな(笑)」
「は、はい…ありがとう…ございます…」
ビク
「なあに、これからも文香のことは儂に任せろ❤このコもそれを望んでるからな❤」
ビュルルッ
ブルルッ
ビュルルッ
「は…はひい❤これからもよろしくお願いしましゅ…おじさまぁ…❤」
「……」

「あ～エロコス楓とアナルセックス捗るぅ♥ひひひひっ♥ほら楓っご主人様って言ってごらん♥」
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ブチュッ
ブチュッ
「あっ♥ごしゅ…っ♥ご主人様??♥」
「ひひっ♥いいねぇ♥これからはボクのことず～っとそう呼ぼっか♥」
「ボクは楓の主人なんだから♥ねぇ、いいよねプロデューサー」
「は、はぁ…楓さんさえいいなら…」
「じゃあOKだね♥楓はボクの言うことなら何でもOKだから♥」

「それにしても♥楓の穴はどこも一級品だなぁ～♥」
「あっ♥あっ♥」
「はっ♥はひっ♥おっ♥お願い♥しますっ♥ご主人様ぁ♥楓のケツ穴ほじりまくってえっ♥」
「ぎっちぎちに締めつけてきて痛いくらいだよ♥」
「ご主人様のカタチっ♥直腸に覚え込ませてくださいいっ♥」
初めてレイプしたときを思い出すなぁ～…すぐにこっちもボクのサイズに広げてあげるからね♥」
「いいねいいね～楓もノッてきたね～♥ステージ終わりでハイになってるのかな？（笑）」

「それじゃあお望み通り最後まで使ってあげるからね♥上手におねだりできるかな？」

「はいっ♥♥」

ズブッ ズブッ ズブッ

「いつでもお好きなときにい♥お好きなところにお射精しくださいっ♥」

ブチュッ ブチュッ

「アイドル高○楓はご主人様専用の便所妻ですぅっ♥」

ズブッ

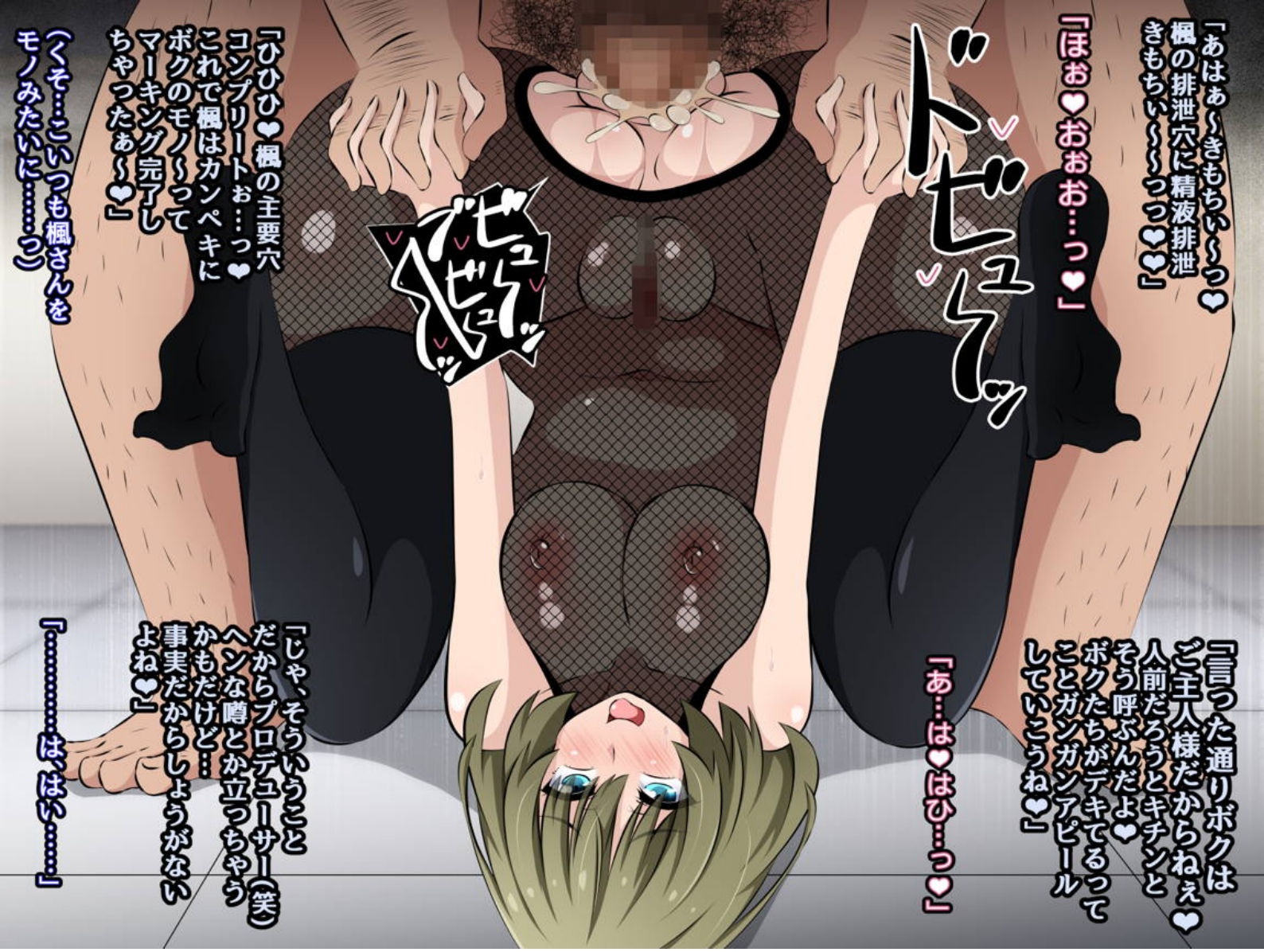
楓に空いてる穴はぁぜ～んぶご主人様が気持ちよ～く射精するための穴なのでぇ…♥」

「か…楓さん…」

「ふぅーっ♥ふぅーっ♥いいよぉ…っ♥アイドルとしてステージに立つクールな姿からは想像できない媚びっ媚びのま○こ顔っ♥アイドルが絶対言っちゃいけない下品な台詞っ♥

あ～精子上ってくるぅ～っ♥」

「おほほ～っ♥♥」
ドビュ～ッ
ブビュビュッ
えぐっぱ!!

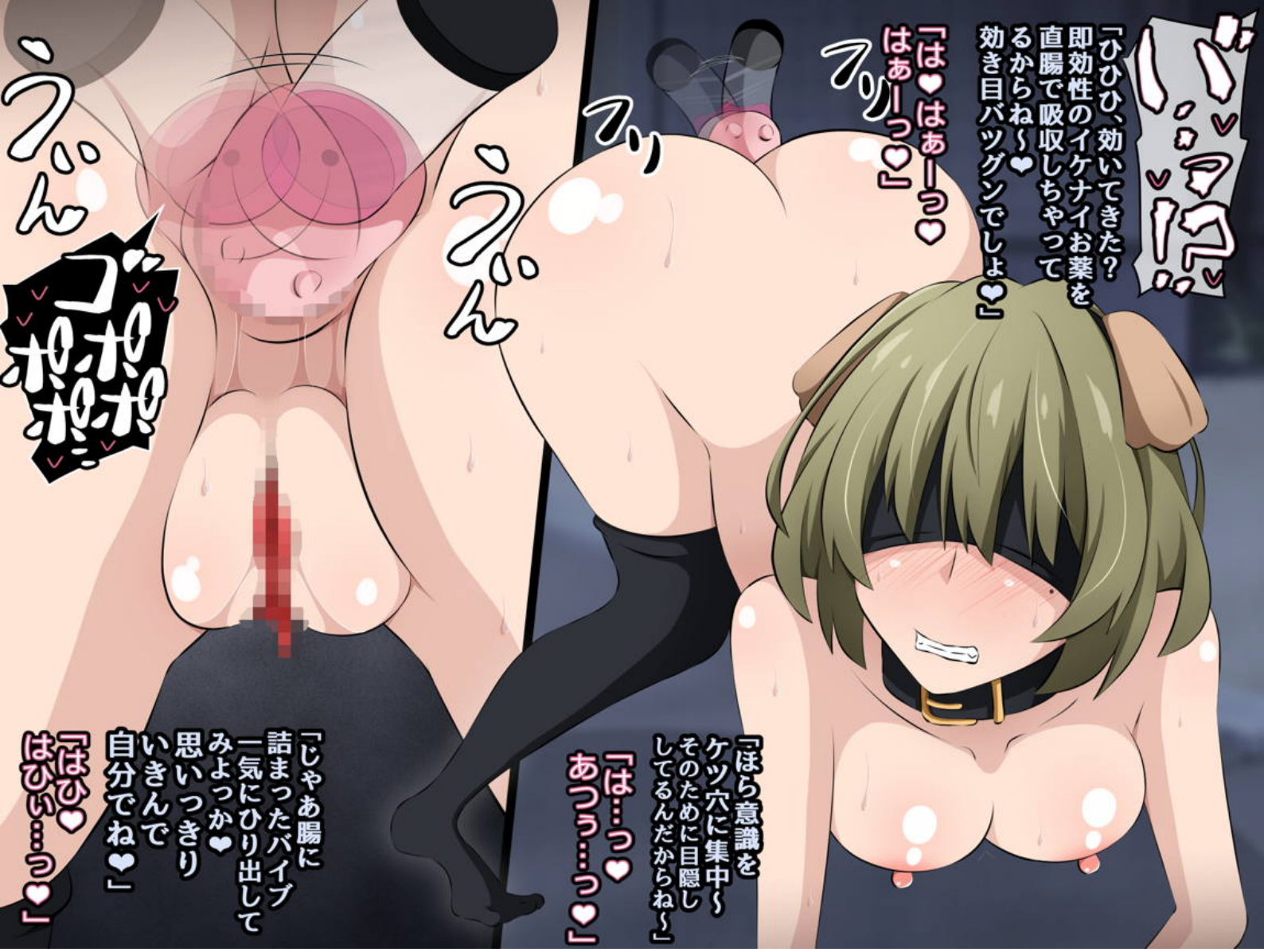

「あはぁ～きもちい～っ♥
楓の排泄穴に精液排泄
きもちい～～っっ♥♥」
「ほぉ♥おぉぉ…っ♥」
ドゼュゼュッ
ブゼュゼュッ
「言った通りボクは
ご主人様だからねぇ♥
人前だろうとキチンと
そう呼ぶんだよ♥
ボクたちがデキてるって
ことガンガンアピール
していこうね♥」
「あ…は♥はひ…っ♥」
「ひひひ♥楓の主要穴
コンプリートお…っ♥
これで楓はカンペキに
ボクのモノ～って
マーキング完了し
ちゃったぁ～♥」
(くそ…こいつも楓さんを
モノみたいに……っ)
「じゃ、そういうこと
だからプロデューサー(笑)
ヘンな噂とか立つちゃう
かもだけど…
事実だからしょうがない
よね♥」
「……は、はい……」

「ん～夜風が気持ちいいねぇ～楓♥」
「わ♥わんっ♥くぅ～ん♥」
「おお～ちゃんと鳴き声でお返事♥優秀なペットだね～楓わんこは♥」
「誰かに見られたら一発で大スキャンダルのお散歩プレイ気に入ってくれたみたいだね♥」
「わんわん♥♥」

「よぉ～し、じゃあ今日こそケツアクメ頑張ろうね♥文香ちゃんみたいに潮吹けるように♥」
「は…わん…っ♥」
「大丈夫大丈夫今日は補助付きだから――」

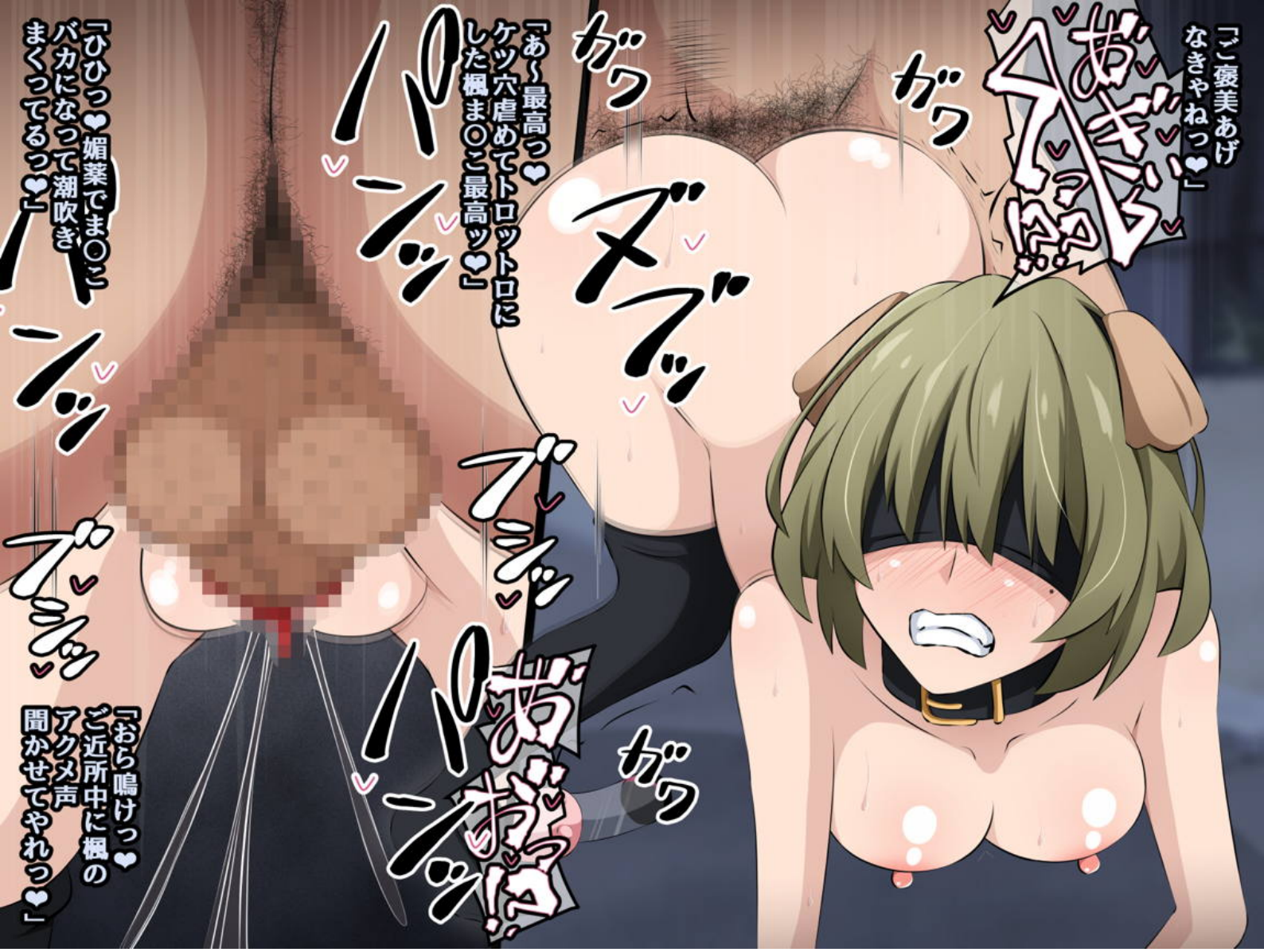
「よぉ～し、じゃあ今日こそケツアクメ頑張ろうね❤文香ちゃんみたいに潮吹けるように❤」
「は…わん…っ❤」
「大丈夫大丈夫今日は補助付きだから――」
「楓わんこの尻尾は特別製でね～❤」
なみ
「バイブの奥から仕込んだ媚薬を注入できるようになってるんだよ❤」
ズッ
プリ
「これキメればケツアクメなんて一発だから❤」
「あ❤あ…❤」
「ほい起動っと❤」

キャフ!?
「っ…冷た…っ♥」
「お～動いてる(笑)尻尾振って悦んでるみたいだな～このエロわんこめ♥」
フリ
フリ
ぐぃん
ぐぃん
ゴポポポポ
「ほら頑張れ頑張れ～あと少しだぞ～」
「あ♥あ♥あ…っ♥」


バッ!!
「ひひひ、効いてきた？
即効性のイケナイお薬を
直腸で吸収しちゃって
るからね～❤
効き目バツグンでしょ❤」
「は❤はぁーっ❤
はぁーっ❤」
フリ
フリ
うぃん
うぃん
ゴポポポポ
「ほら意識を
ケツ穴に集中～
そのために目隠し
してるんだからね～」
「は…っ❤
あつぅ…っ❤」
「じゃあ腸に
詰まったバイブ
一気にひり出して
みよっか❤
思いっきり
いきんで
自分でね❤」
「はひ❤
はひぃ…っ❤」

おぉぉぉぉ!!
ぜっ
ぜっ
「おっほ♥出た出たぁ～♥」
ズルゥッ
ぜっ
ブシャアッ

「よぉ～しよしよし♥偉いぞ～楓♥上手にケツアクメできたねぇ～♥」
「あーっ♥あーっ♥♥」
ぜつ
「いひひひっ♥ケツ穴から媚薬キメて潮吹きガチアクメ♥道端に愛液マーキング…♥」
ぜつ
ぽっ
かり
「超人気アイドルなのにAV女優顔負けのプレイができちゃうエロわんこにはぁ…」
ぜつ
ブシャアッ


「ご褒美あげなきゃねっ♥」
おぎゃっ!!
ガク
ガク
「あ～最高っ♥ケツ穴虐めてトロットロにした楓ま◎こ最高ッ♥」
パンッ
ズブッ
ブシッ
パンッ
おぎゃっ!!
ガク
「ひひっ♥媚薬でま◎こバカになって潮吹きまくってるっ♥」
パンッ
ブシッ
「おら鳴けっ♥ご近所中に楓のアクメ声聞かせてやれっ♥」

おぉぉぉ!!!!
ブゼュゼュゼュゼュッ
ブシャアッ
ブドドドチゼゼゼウウウュュュュッッッッッッ
『おっ♥ほぉ〜っ♥』

「あ～イイ～❤❤
夜のお外で楓わんこと
ガチ交尾クセになるぅ～❤」
おほぉ
おぉ
おぉっ
ブゼュゼュゼュゼュッ
「にしても良く効くなぁ～
さすがおじさんに回して
もらったクスリ❤」
ブシャアッ
「楓も気に入った
みたいだし❤
これからもときどき
使おうね～❤」
はぁはぁ
「最後の一滴まで…ひひっ❤
楓の遺伝子とまぜまぜ
しあわせ～❤」

「なあに用量を守れば問題ない。ほれヤッてみろ…気持ちいいぞ❤」

「は…はい…」

「鼻から一気に吸い込め❤
そこにあるだけ全部な」
「は…あ…」
スゥ…

「鼻から一気に吸い込め❤
そこにあるだけ全部な」
「は…あ…」
ズズズッ

「鼻から一気に吸い込め♥そこにあるだけ全部な」

「は…あ…」

ズズズッ

「あ♥あ？♥あ…っ♥」

チカ

チカ

「よしよし♥効いてきただろ？頭と子宮にガツ～ンとな♥」

「ひひひ♥じゃあ次はどうすればいいかわかるな？」

「は♥はい…♥」

「はい…っ♥♥」

「はっ♥はっ♥はっ♥はぁっ♥はぁっ♥」

「ひっひっひ♥どうだ文香？今までとは比べものにならんほど気持ちいいだろ♥」

「はいっ♥あっ♥はいいっ♥♥」

「そうだろそうだろ♥女はみ～んなこの薬が大好きだからな♥アイドルだって例外じゃないぞ♥」

バチュッ

バチュッ

バチュッ

ブチュッ

「イイっ♥あっ♥イグッ♥♥♥何度もイッてるのに腰止まらないひいっっ♥♥♥♥」

「この薬のためだけに生きてるアイドルも何人もいるからなぁ…♥」

「ああ、安心しろ文香♥お前はハマり過ぎて壊れないよう儂がしっかり管理してやる」

「お前はまだまだ壊すには惜しいからな♥」

「あっ♥ありがっ♥ありがとうございまっ♥♥」

「…ひひっ♥それにしてもついにキメセクまで覚えてしまったなあ文香♥ビッチらしい格好も似合ってるぞ」

バチュッ

バチュッ

バチュッ

ブチュッ

ブチュッ

「今まで控えめに生きてきた反動か(笑)これからはどんどん悪いコトも覚えていくんだぞ？儂専用のイイ性玩具(アイドル)になるためにな♥」

「はあっ♥あっ♥あ～っ♥」

「よし❤今日は特別に注射も一本打ってやる❤」
ブチュ
カス
ビク
ビク
ビク
おっ!!
「初キメ記念にな❤ほれイキ狂えっ❤儂もイクぞお〜っ❤」

「ほほお〜っ♥」
ドガァ
ガワ
ガワ
ガワ
ビュビュビュ

「ひっひっひ♥豚のようなイキ声を上げおって♥」

「やはり薬でトロけさせたメスガキま〇こに射精するのはたまらんのぉ～♥」

「あ～～～っ♥あぁ～～～～っ♥♥」

「おっ♥♥ほぉおおお♥お～っっ♥♥」

ドガァ

ガワ

ガワ

ガワ

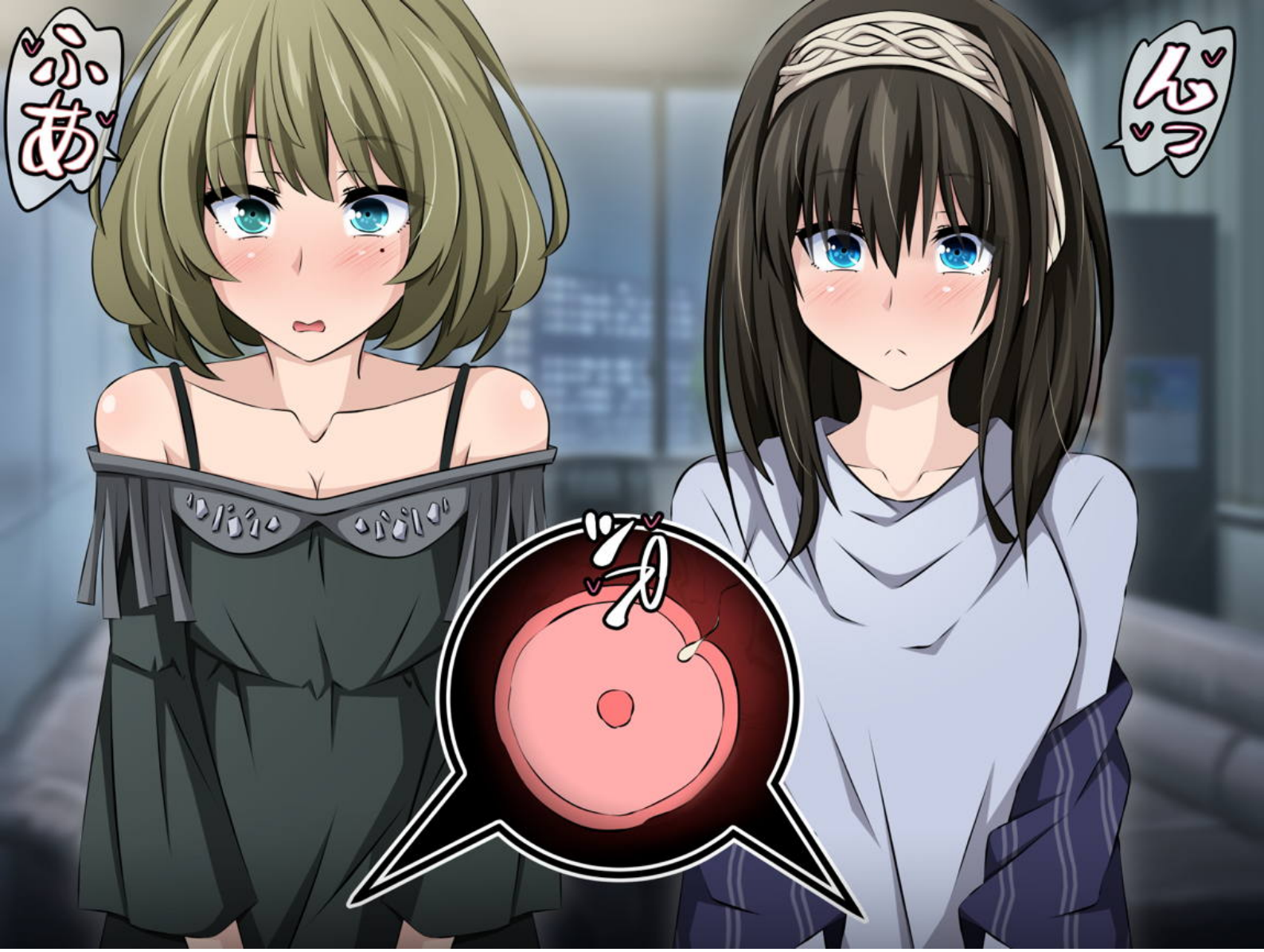
ブビュビュッ
ブチュビュッ
ビュッビュッ

「聞こえ取らんか(笑)このままでは二人とも仲良く孕んでしまうかもしれんなぁ…同じ成分の薬を回してやった高〇楓と同時にな…♥」

「ああ、ひとつ言い忘れたがこの薬を使うと卵巣がバカになってしまってな？受精確率が跳ね上がってしまうんだが…別に構わんよな？(笑)」

そんなことが
続いたある日――
「二人ともちょっといいか？
明日のステージのことで相談が…」

「あ、ごめんなさい
プロデューサーさん
私これからおじさまとの
レッスンがあるので――」
「なにかあるなら
明日のステージ直前に
教えてください。
それでなんとかなるでしょう」
ふぅ…
「私も…
これからご主人様と
デートなので…
もう失礼します」
「ちょ、ちょっと
二人とも――」


ふあ
んっ
ツル

「……？どうしたんだ？」
「……いま……何か……♥」
「……ええ……私も……♥」
ドキ
ドキ

「？　なんなんだ…？」
「いえ、なんでもありません♥ただ――」
キュン
「なんとなくとっても幸せな気持ちになっただけなので♥」
「きっと気のせいでしょう♥ただ――」
「……？？」

このときに気がついていれば
まだ間に合ったかもしれない…

……いや……手遅れか…
もうきっと……最初から――

数週間後――

「は、はっ、はぁっ、
はぁ――っ」

「文香ーっ」
ズチュ
ぢゅぢゅっ
ぢゅるるっ
ぺろぺろ
「よしよし、いいぞぉ❤」
シコ
シコ
「そのコリコリしたところが前立腺だ❤そのあたりを重点的に舐めなさい❤」
ブチュ
ぬぢゅココ
ろりコリ
ろおり
「はあ…はあ…ふ…文香…」
「おお、プロデューサーくんじゃないか早かったね(笑)」

ぢゅぢゅぢゅ
ぱぱぱっ
「おほっ♥ほっ♥ほ♥」
ゼュルッ
ゼュルッ
メチュメチュ
「ひひ♥ほれ文香…プロデューサー来てくれたぞ？きちんと顔を見せてあげなさい。儂のケツ穴が名残惜しいのはわかるが(笑)」
「……」
「ちゅ♥ちゅ～っ♥ぷぁ…♥はぁい♥」

「ぷはっ♥ごめんなさいプロデューサーさん♥プロデューサーさんを待ってる間にアナル舐めを教わってたんですけど…おじさまのケツ穴が美味しくってつい…♥」

「い…いや…」

ゼロゼロ

トロ…

ヌトト

ペろ

「そ、それより…っ本当なのか…電話で言ってたこと…」

「……はい♥ホントですよ――」

「私…妊娠しちゃいました♥」
『……!!』
ゼロゼロ
トロ…
ストン
ス…
「もちろんおじさまの子です♥ばっちり当てられちゃいました♥」
「いやあすまんね(笑)レッスンがてらつい勢いあまって孕ませてしまったよ♥」

「……そ…
それで…
どうするんだ…？」

「はい♥私…
産みたいと思います♥
せっかく授かった
おじさまとの子ですもの♥
産んであげたい…♥」

「……で、でも」
「産みます♥」

「……」

ゼロゼロ

トロ…

「いやあすまんね♥
いつの間にか文香の心を
射止めてしまっていた
らしい(笑)
まぁ共演者に愛が芽生える
なんてよくある話じゃ
ないか♥」

ストン

「ごめんなさい
プロデューサーさん♥
……それで…実は
プロデューサーさん
にはひとつお願いが…」

「……ああ…
仕事の調整なら
なんとか――」

「ああいえ…
そうじゃなくて
プロデューサーさん
には――」

「子育てをお願いします♥
私が孕まされてしまった責任♥
取ってくださいね♥」

「え……っ!?」

「何を驚いとる？
担当のアイドルが妊娠したら
プロデューサーが責任を取る
のは当たり前だろ？
キミが寝取られたのが
悪いんだから(笑)」

ゼロゼロ

トロ…

「頼むよ♥
本来は儂が責任を
取るべきなんだが、
儂はプロデューサー
ではないからな(笑)」

ストン

「なあに心配するな
アイドルの仕事の方は
儂が調整してやるから」

「……は、
はい……」

「ただし十ヶ月後は
覚悟しておけよ？
忙しくなるぞ～
なにせ一人じゃ
ないからな…♥」

オルルル…

「……？
楓さんから…
電話…？」

「はぁ…はぁ…」
「んぅ～♥」
「おっ♥おっ♥持ってかれるぅ～♥ひひっ♥すっかりフェラにも慣れたね～楓♥」
「か、楓さん…」
「あ、プロデューサーいらっしゃ～い♥ごめんね～ちょっと待ってていま射精しちゃうから…♥」
ズブブぢゅぅぅ
ブぢゅぅ

「おほっ❤
ほら見て見て
この激しい
喉奥ピストン❤
これ僕が仕込んだ
んだよ～」

ブチュ
ゴチュ
ブチュ
ブボ

「いや～苦労したよ～
やっぱりアイドルにとって
喉って大事みたいでさ～❤
でもほら、この通り❤
やっとわかったみたいだね～
歌なんかよりち○ぽ気持ち
よくする方が大事だって❤」

『……』

「ひひひ❤
チン毛に顔うずめちゃって❤
もうち○ぽに夢中だね❤」

ブボ
ブボ
ブボ
ブボ
ブボ
ゴボ

「ぶひょ❤」
えっほっ
「おほ～❤
楓の喉ま○こに射精っ❤
しあわせ～❤
楓～まだ飲み込んじゃ
ダメだよ～❤お口に溜めて…
ってわかってるか❤
毎日してるもんね～❤」
ドクドクウ
ゼュルゼュルゼュル

「あ～ん♥♥♥」
「お～ひひ♥ほら見てプロデューサー楓のお口にこんなにいっぱい射精しちゃった♥」
「……」
「じゃ～楓♥ソレ食べていいよ～」
「ふぁい♥いたらきまぁす♥」
ぐぽぁ
ぬぽぉ
ヌトト

「あ～ん♥♥♥」
「お～ひひ♥ほら見てプロデューサー楓のお口にこんなにいっぱい射精しちゃった♥」
「……」
「じゃ～楓♥ソレ食べていいよ～」
「ふぁい♥いたらきまぁす♥」
もぐ
ぬぽぉ
ヌトト
もぐ
もぐ
「あむっ♥」

「はぁ～♥♥ごちそうさまでした♥」
「はいお粗末様でした♥ひひ、くっせ～ザー臭(笑)アイドルがさせていい口臭じゃないよ♥」
「……
……あ、あの…」
むあこ
ぬぽぉ
ヌトト
「あ、そうだそうだお待たせ(笑)ほら楓、プロデューサーに見せてあげて」
「はい♥あの、プロデューサー…お電話でもお伝えしましたけど…」

「私、ご主人様の子を妊娠してしましました♥」
「か…楓さんまで…」
「あれ？もしかして知ってた？……おじさんめ～妊娠報告ドッキリは僕が最初にしたいって言ったのに…」
（こいつら…文香や楓さんの妊娠を遊びみたいに…っ）
「まあいいか（笑）じゃあわかってるよね？子育てはプロデューサーの仕事だってこと…♥」
「すみません♥お願いしますねプロデューサー♥」
ヌトヽ

「あ、それから楓には妊娠のコト公表させるつもりだから❤僕の名前は伏せるけど(笑)これでアイドルも晴れて引退だね～❤」
「……そ、そんな……
……か、楓さんはそれでいいの…？」
「はい❤ご主人様を気持ちよくすることだけが私の幸せですから❤私が妊娠を公表したら全国のファンから私を取り上げた感じがして支配欲が満たされる…そうですよね、ご主人様❤」
「そうそう(笑)よくわかってるね～楓は❤さすが僕の便所妻❤」
「……っ」
ヌトヽ
「じゃ、そういうことだから❤十ケ月後はよろしくね～プロデューサー(笑)」

そして
十ヶ月後――

「ん～楓～♥僕の楓～♥」
「んっ♥ご主人様♥またこんなところで…♥」
「ごめんね～♥楓を好きな気持ちが抑えられなくてさ～(笑)」
ぶちゅうう
おぎゅぅぅぼ
もむ
もむ
「うひひ♥またお腹おっきくなったな～♥僕たちの愛の結晶が育ってる証拠だね♥」
「んっ♥ちゅっ♥ちゅっ♥」

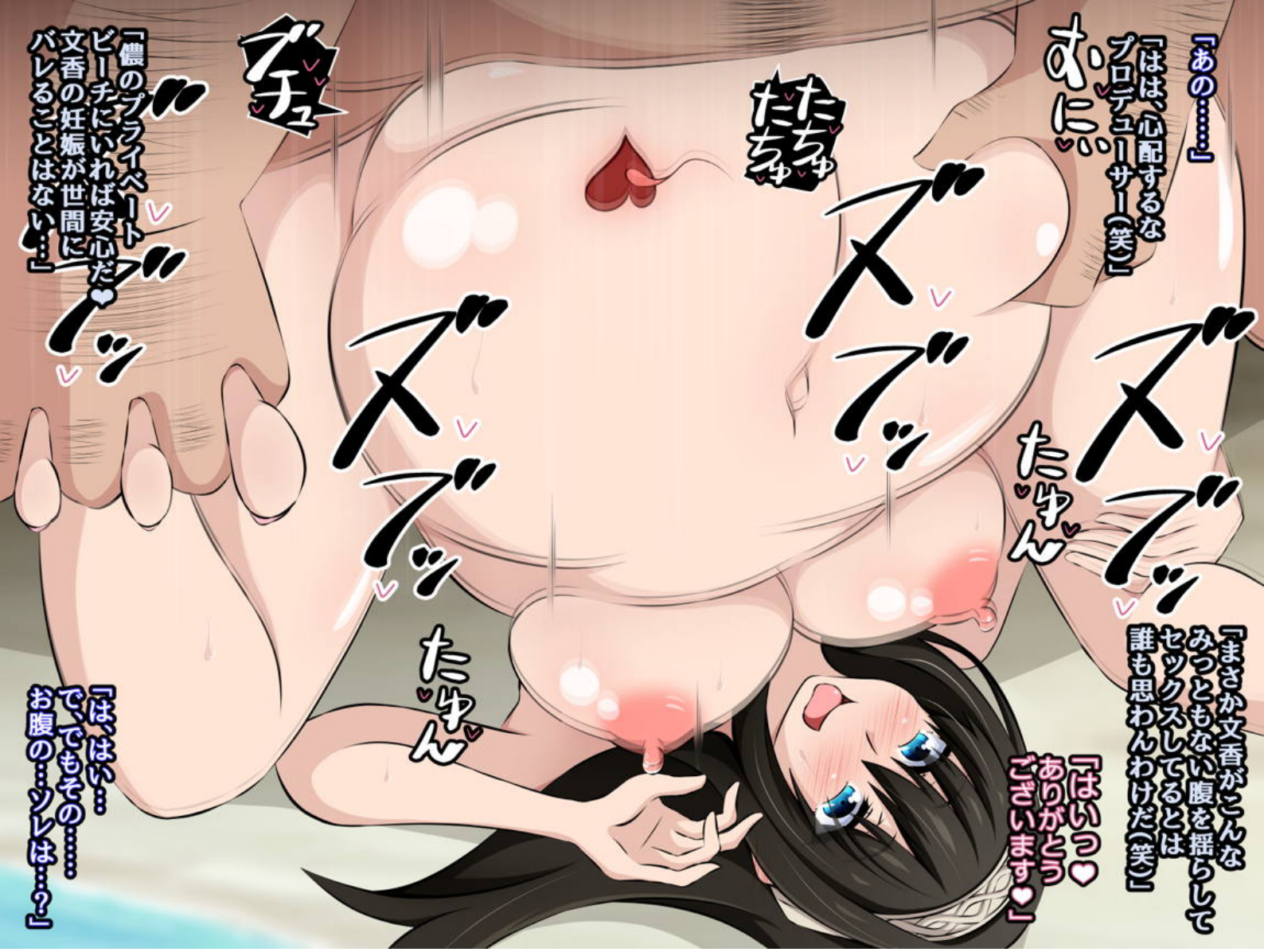
「んちゅ♥嬉しいですけど…♥
また誰かに見られちゃいますよ♥」
ぶちゅうう
「いいよ別に～
僕たちが結婚してるのは
ホントのことなんだから♥
逆にこれくらいは見せて
ファンだった人たちに
サービスしなきゃ(笑)」
おぎゅぅぼ
もむ
もむ
「ほら楓、あっちの影から
狙ってる週刊誌のカメラ
めがけてピース♥」
「はぁい♥」

ゾクゾク
ゾクゾク
ピースピース

「ははは、アイツめ
また派手にやってるな(笑)
週刊誌に撮られるのは
これで何度目だ?」
「……」
電撃結婚で引退した
元人気アイドル
高◎楓が妊娠!?
ハメ撮り動画の流出…
現役時代から続く『ご主人様』
との怪しいカンケイ…
「過去に出したCDやら
写真集やらが大量廃棄
されてちょっとした
騒ぎになってるらしい
じゃないか(笑)
キミも元担当として
頭が痛いだろ(笑)」
「は、はあ…」

「まあ気持ちはわからんでもないがな？ほれ見てみろこの腹…あのスレンダーなモデル体型が見る影もないじゃないか❤」
電撃結婚で引退した元人気アイドル高◎楓が妊娠!?
ハメ撮り動画の流出…現役時代から続く『ご主人様』との怪しいカンケイ…
「アイドルを孕ませて腹をボッテリ膨らませファンを裏切らせる❤オスとしてこれに勝る優越感はないだろ❤」
『……』

「なあ文香♥」
むに
たゆん
ズブッ
たちゅ
たちゅ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
たゆん
ブチュ
ズブッ
「あっ♥あんっ♥おじさまっ♥おじさまぁっ♥」
「……」


「あの……」
「はは、心配するなプロデューサー(笑)」
すに
たちゅ
たちゅ
ズブッ
ズブッ
たゅん
ズブッ
ズブッ
たゅん
「まさか文香がこんなみっともない腹を揺らしてセックスしてるとは誰も思わんわけだ(笑)」
「はいっ♥ありがとうございます♥」
ブチュ
「儂のプライベートビーチにいれば安心だ♥文香の妊娠が世間にバレることはない…」
「は、はい…で、でもその……お腹の…ソレは…?」

「ああ、これか♥そういえばキミにはまだ見せてなかったなこのタトゥー♥」

「たいタトゥーって」

たちゅ

たちゅ

ズブッ

ズブッ

たゅん

「ごめんなさいプロデューサーさん♥おじさまの子供を妊娠したのが嬉しくてつい……」

「いやあすまんすまん♥文香のボテ腹に似合うと思ってつい下品なのを彫ってしまったよ(笑)ほれ文香も謝りなさい。お前が彫りたいと言ったんだからな♥」

「はいっ♥♥」

「一生消えない落書きお腹に入れちゃいました♥もう水着の仕事はできませんね(笑)ごめんなさ〜い♥」

「…文香……」

「そんな顔をするなプロデューサー♥文香だって悪気はなかったんだ(笑)……おっと…そろそろ――」

ビュッ
ブルビュルッ
「射精すぞ文香っ❤」
「……う……」

「ひっひっひ♥
やはりたまらんの～
鬱勃起した童貞Pの隣で
無責任に孕ませた
アイドルに膣内射精♥」

「く……」

ブルビュルッ

ゴポポ

ブチュウウ

「おじさまが孕ませた
からこうなったのにっ♥
十ヶ月間大事に育てたコ
に精液かけながら
そんなこと言うなんて♥」

ゼワ

ゼワ

「この崩れた体形…っ♥
まったくなんだ～この腹は？
せっかく射精してやってるのに
肝心な部分…儂と文香が
繋がってる部分が見えないじゃ
ないか♥」

「ああぁんっ♥♥
おじさまのイジワルぅ♥」

「おおそうだ、十ヶ月…
もう予定日だったな♥
ひひ♥それじゃあ
そろそろ…
産ませてみるか♥」ワ

「ほれ文香
あ～んしなさい❤」
「あ～ん❤」
「はは、近頃は前に増して
さらに従順になったな❤
まだこの薬が何かも
わかってないのに(笑)」
「ちょ、ちょっと…」
「いやいや、安心しなさい
ただの陣痛促進剤だ❤
医療機関でも使われて
いる普通の薬だよ
ほれいくぞ～❤」
はぁ～…

「あむっ♥」
ぱくっ
「おっナイスキャッチ♥
ははは、こうしてると
餌付けしてるようで
面白いな(笑)」
『……』
ごっくん
「さて…薬が効いてくるまで
少し時間がかかるから…
その間に文香には――」

「今日の分のご褒美をやろう❤」
「あっ❤」
「な……っ」
「ほ～れ文香の大好物だぞ❤
ひっひっひ❤
お前のホントの餌は
こっちだったなぁ～❤」
さらさら
ビンッ

「そ、それって…っ」

「ん？　今更何を驚いておる
見せるのは初めてだったか？
文香がドラッグをキメるところ❤
もう随分前からヤッてるんだがな？
それこそ妊娠する前から…」

「はぁ～っ❤
はぁ～っ❤」

うず

「はぁ～っ❤
おじさまっ❤
早くっ❤
早くうっ❤」

うず

「はしたないぞ
アイドルが涎を
垂らして(笑)
ほれ待て～
まだ『待て』だ❤」

「はぁ～っ❤
はぁあ～っ❤❤」

「心配するな…
確かにさっきのとは違って
思いっきり人体に有害な
シロモノだが(笑)」

だら

だら

「文香にはちゃんと
容量を守らせている❤
ほれ、クスリを前に
してもちゃ～んと
『待て』ができてる
だろ？ギリギリだが(笑)」

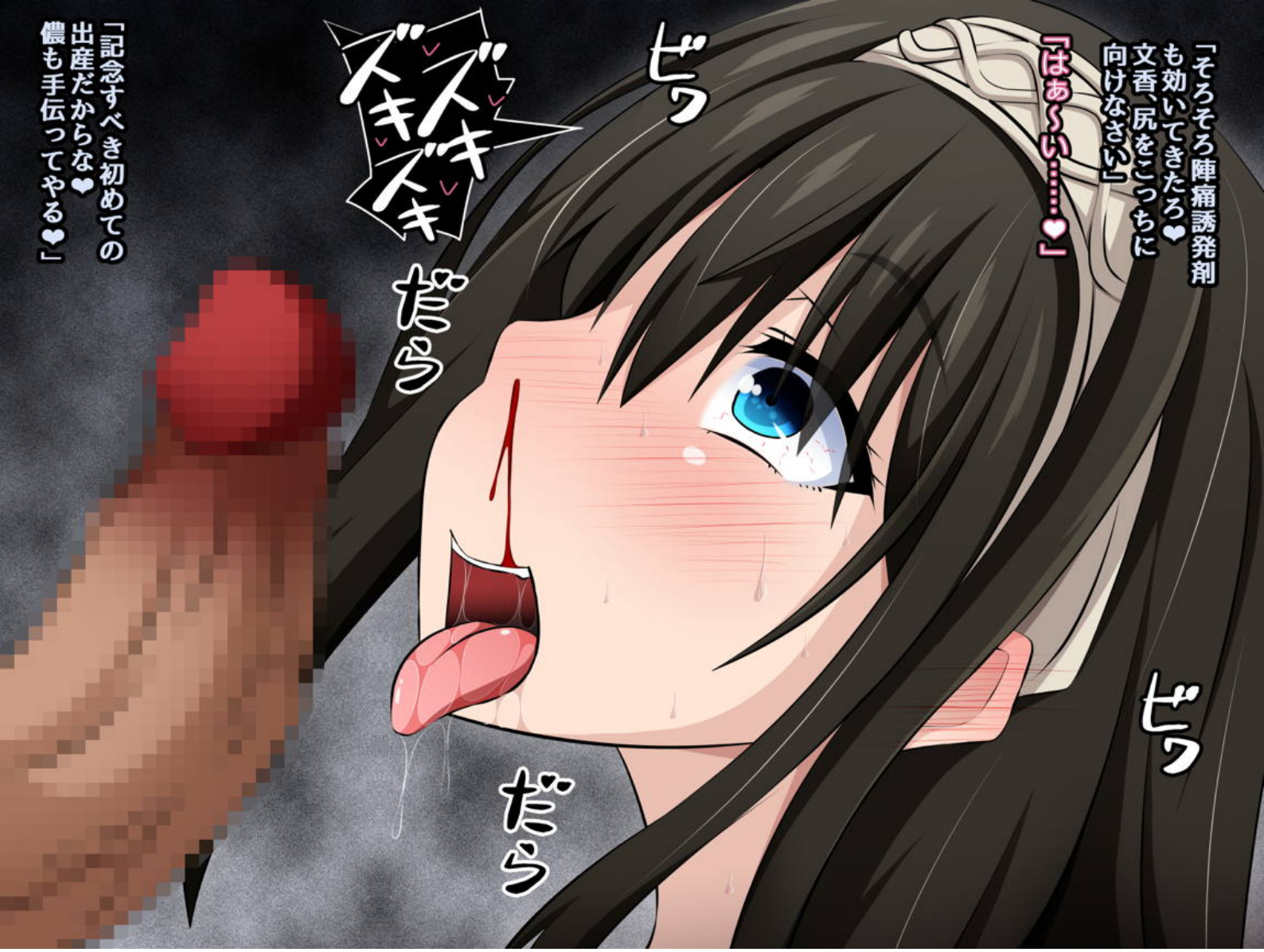
「……っ」

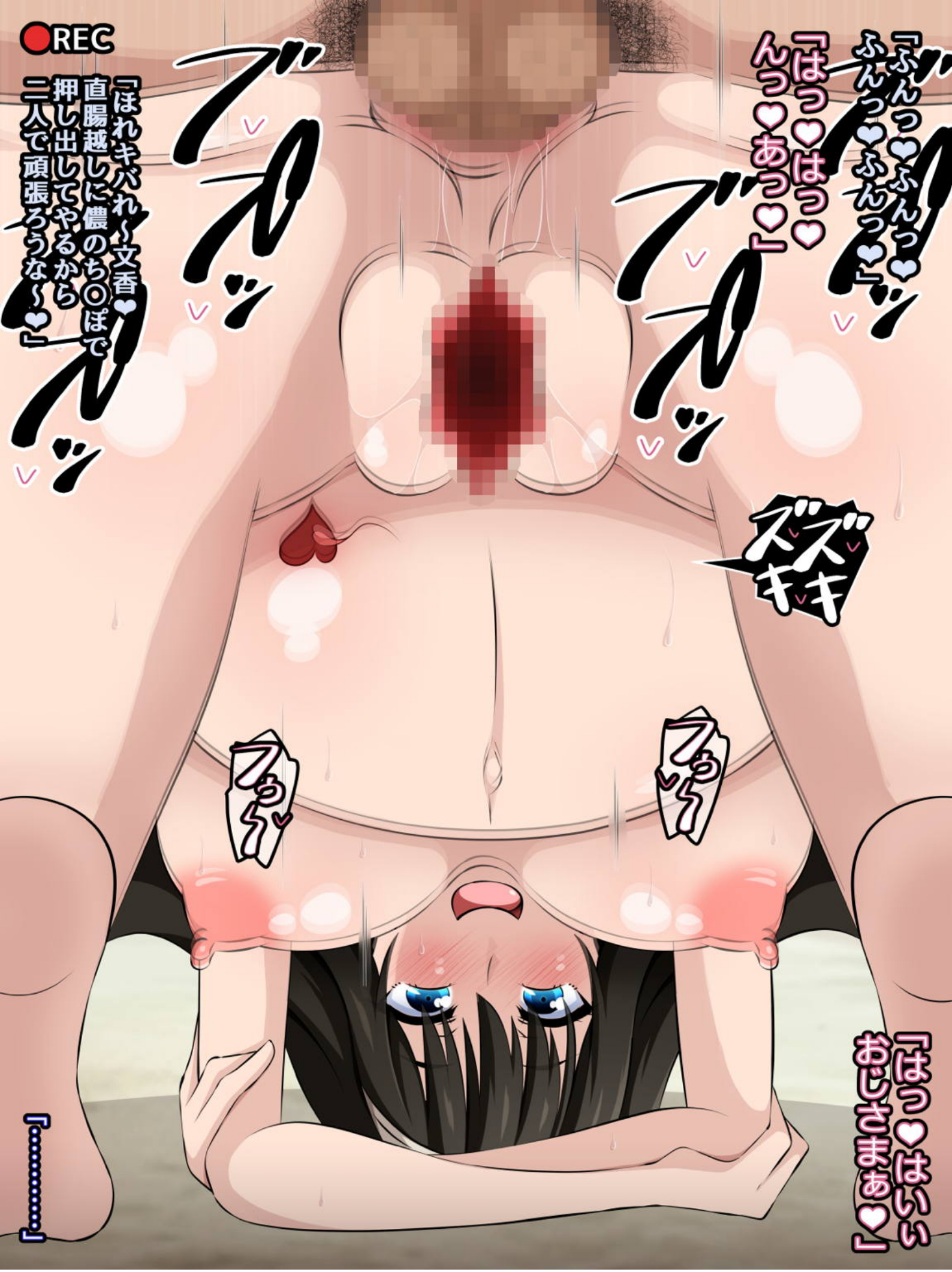
「あ、こらっ(笑)」
ぶべっ
『!!』
ズズぅ〜
「全く仕方ない雌豚だな
文香は❤
竿まで舐める必要は
ないんだぞ❤」
「だってぇ〜っ❤
ふごっ❤
おじさまのち〇ぽ
美味しいもぉん❤
おち〇ぽ舐めながら
キメるの最高ぉ〜❤」
べろぉ

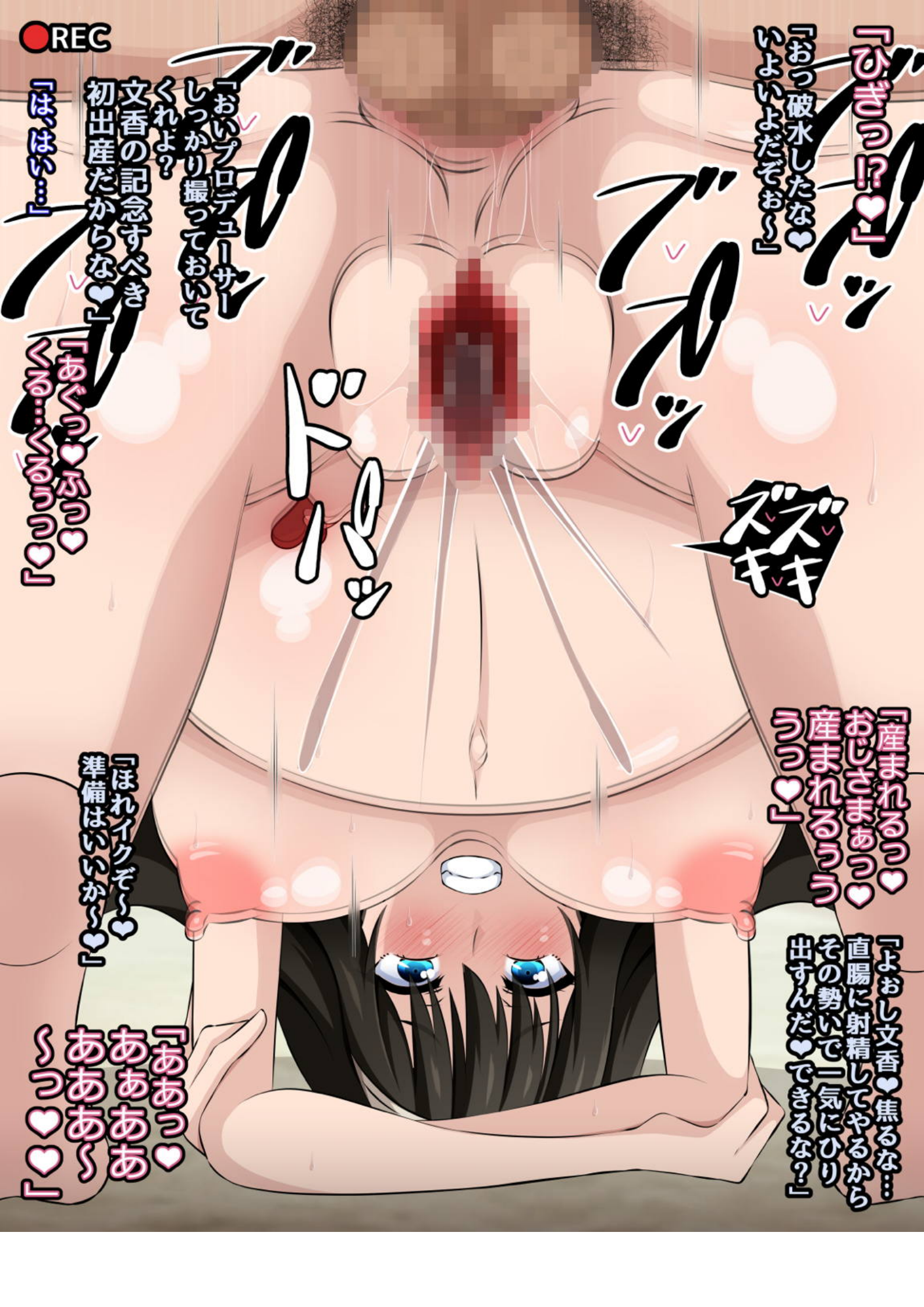
「えへぇ♥あ～キクぅ～♥♥」
「プロデューサーの前で取り繕うのも完全に忘れてるな(笑)まあこれも若気の至りということで許してやってくれ♥」
「これでも気を使って痕が目立つ注射は控えてるんだぞ？そのあたり、逆に感謝してもらわんと(笑)」
「は、はい…ありがとうございます…」
「やっぱ鼻から吸うのがいちばぁん♥脳にい♥ひひひぃ♥」
ズキズキズキ
はぁ
はぁ
「確かにもうクスリなしではまともな生活も送れない身体だが、芸能界では珍しいことではないからな♥」

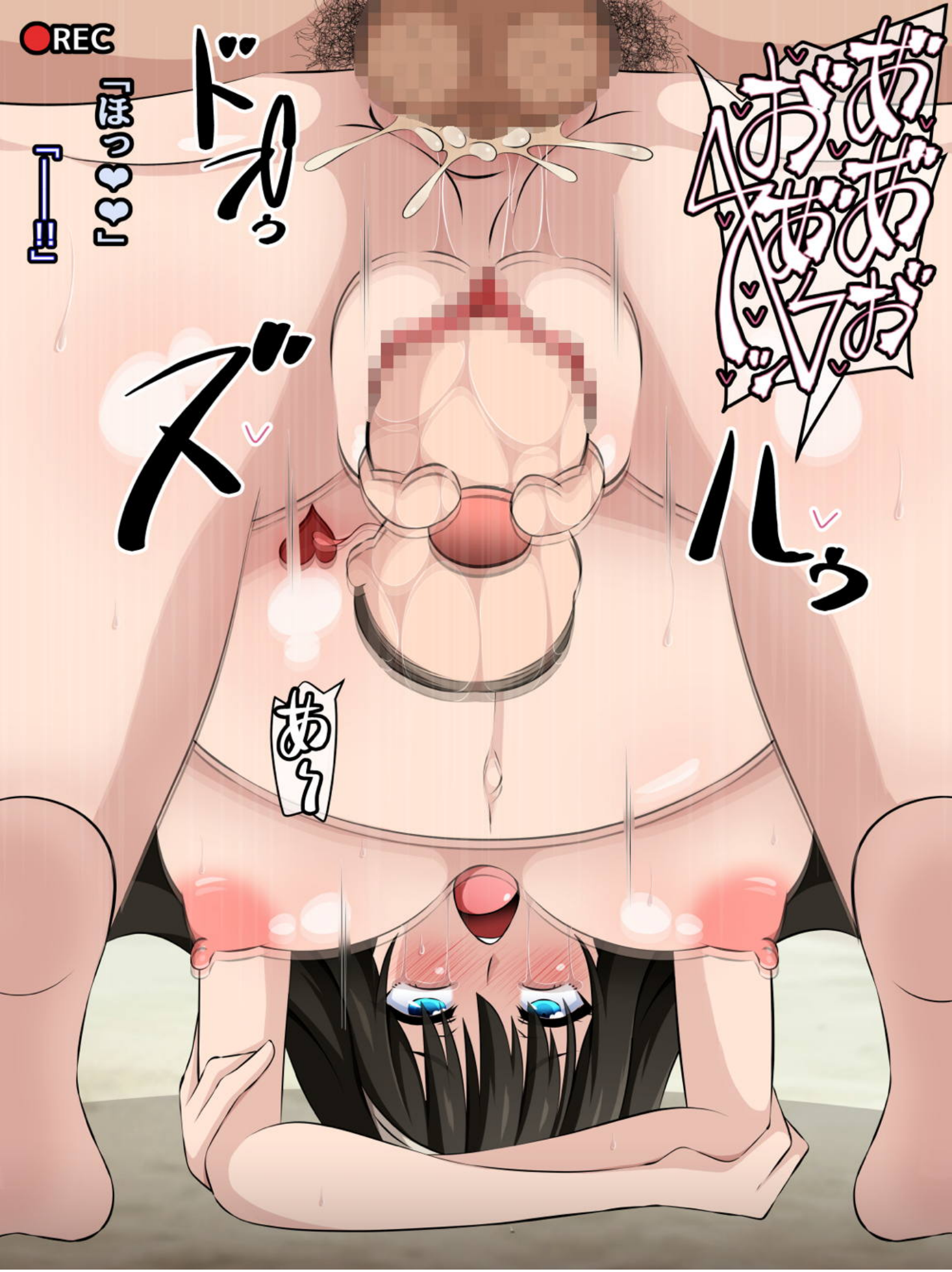
ハ♡おア
ブチッ
ブシュッ
「問題あるまい
アイドルなんて
頭すっからかんでも
できる仕事なんだから♥
なあ文香、大丈夫だろ？」
「文香…っ!!」
「これこれ、大騒ぎするな
鼻血くらいで…
脳の血管かどこかが
キレただけだろ♥」

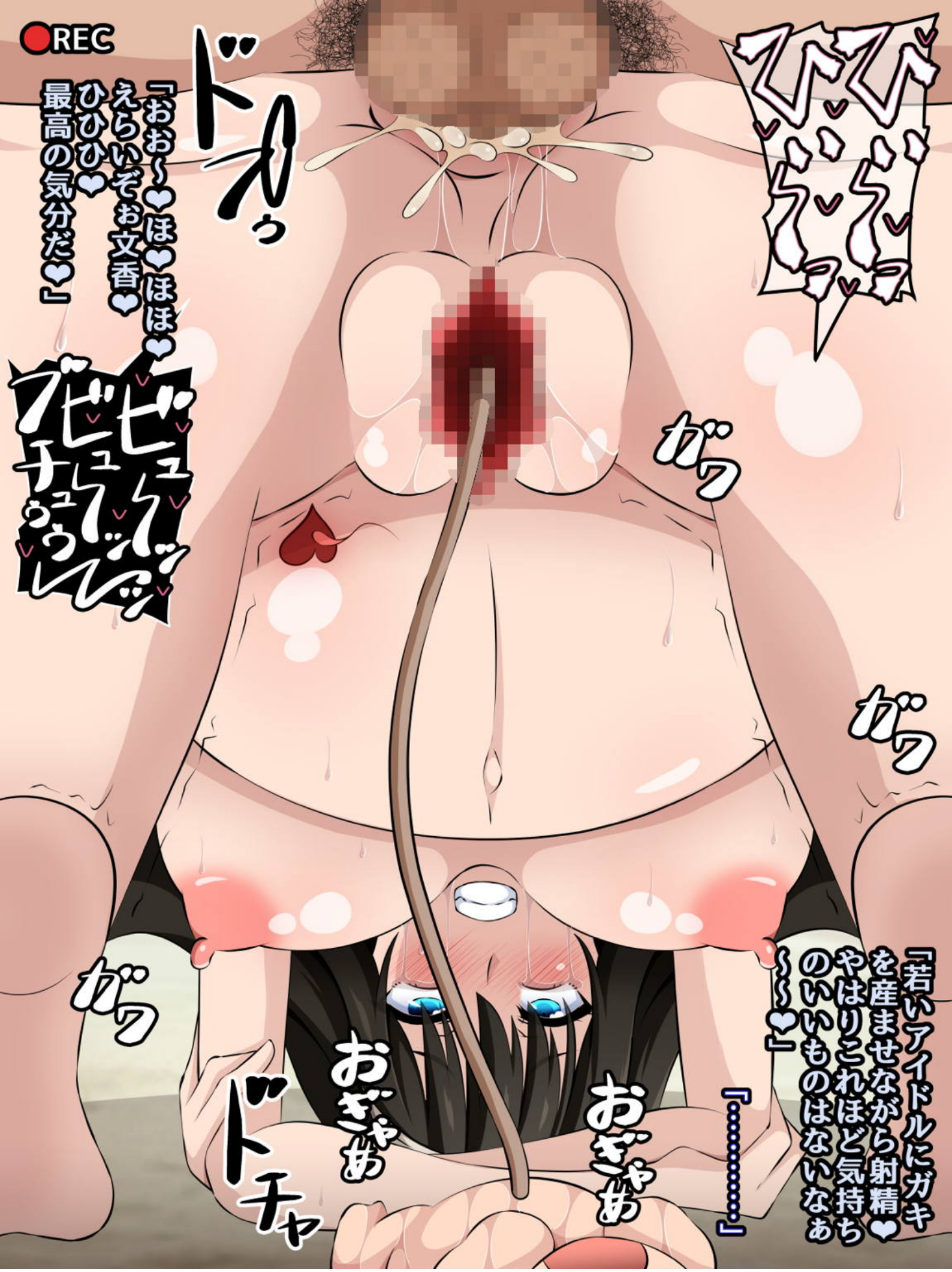
ハ♡ハ♡ハ♡
「問題あるまい
アイドルなんて
頭すっからかんでも
できる仕事なんだから♥
なあ文香、大丈夫だろ？」
「だいじょ～ぶ
で～すぅ…♥♥」
「ほら（笑）
これで出産の痛みも
全部快楽に変わる
からな～♥」
「く……」
ブチッ
ブシュッ
「文香…っ!!」
「これこれ、大騒ぎするな
鼻血くらいで…
脳の血管かどこかが
キレただけだろ♥」

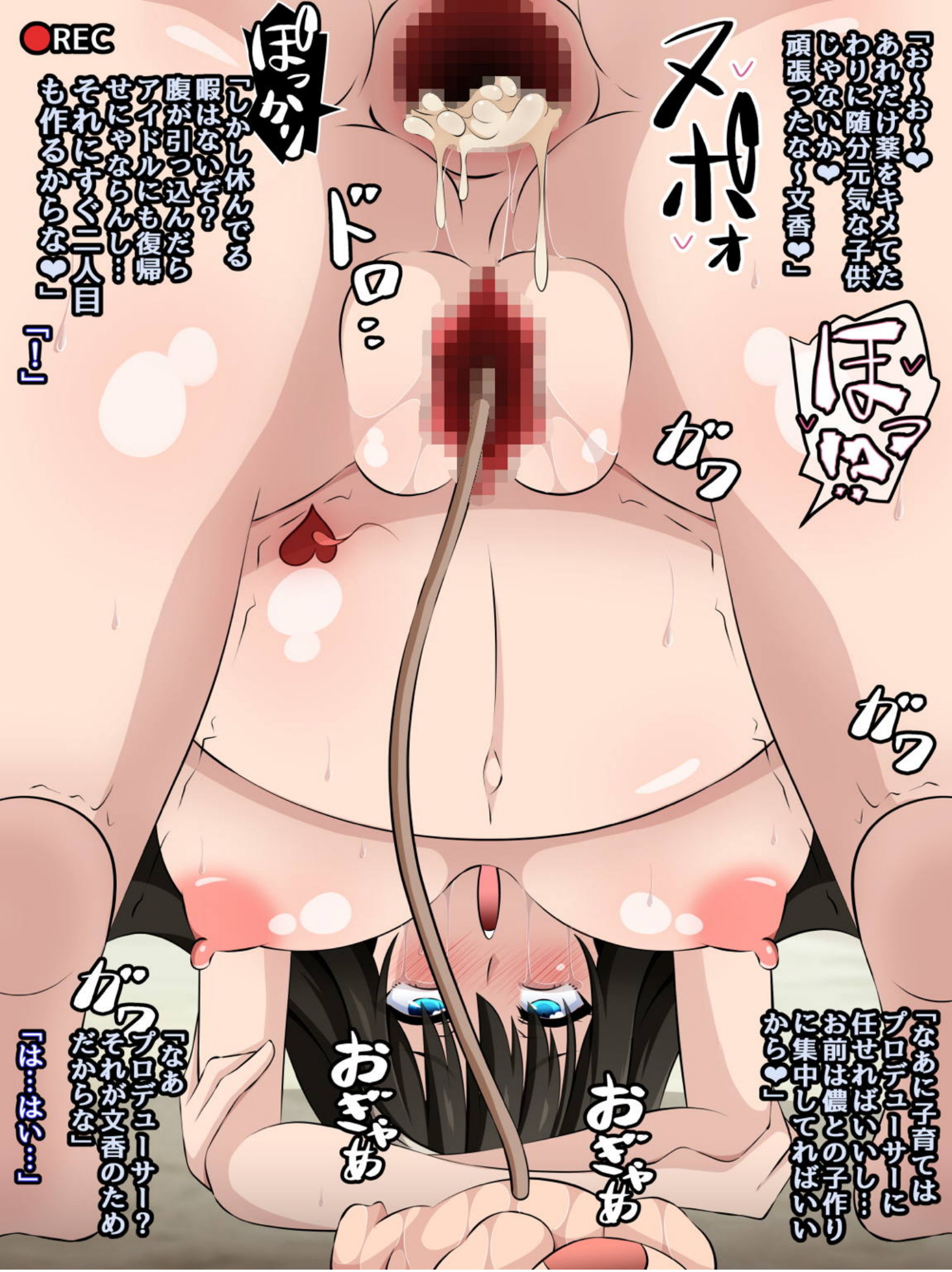

「そろそろ陣痛誘発剤も効いてきたろ❤文香、尻をこっちに向けなさい」
「はぁ〜い……❤」
ビク
ビク
ズキズキズキ
だら
だら
「記念すべき初めての出産だからな❤儂も手伝ってやる❤」

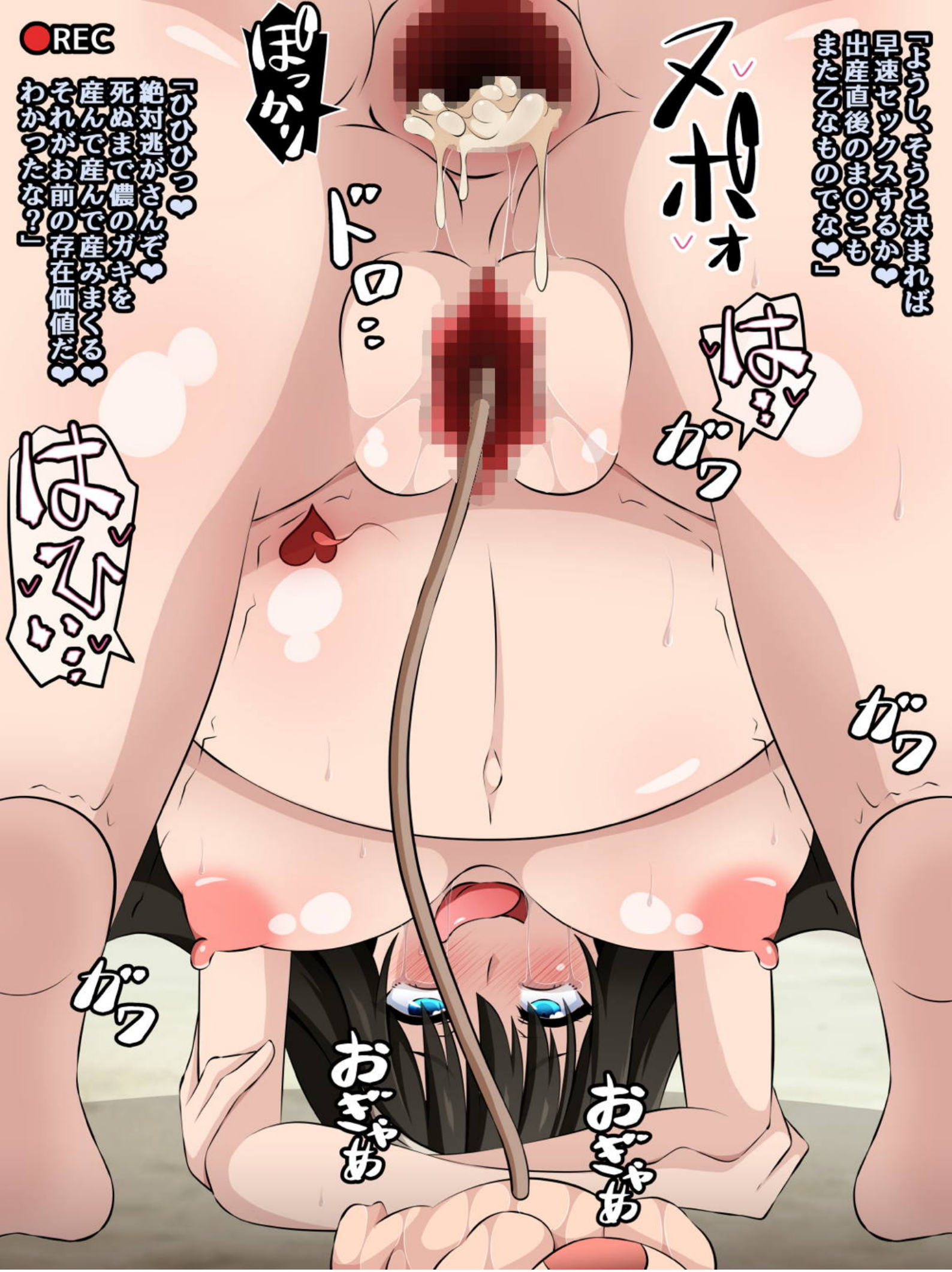

●REC
「ふんっ♥ふんっ♥ふんっ♥ふんっ♥」
「はっ♥はっ♥んっ♥あっ♥」
「ほれキバれ～文香♥直腸越しに儂のち◎ぽで押し出してやるから二人で頑張ろうな～♥」
ブッ
ブッ
ブッ
ズズキ
ブラ
ブラ
「はっ♥はいいおじさまぁ♥」
「……」


●REC
「ひぎっ!?♥」
「おっ破水したな♥いよいよだぞぉ~」
「おいプロデューサーしっかり撮っておいてくれよ?文香の記念すべき初出産だからな♥」
「は、はい…」
「あぐっ♥ふっ♥くる…くるうっ♥」
「産まれるっ♥おじさまぁっ♥産まれるううううっ♥」
「よぉし文香♥焦るな…直腸に射精してやるからその勢いで一気にひり出すんだ♥できるな?」
「ほれイクぞ~♥準備はいいか~♥」
「あぁっ♥あぁぁぁぁぁぁぁ~っ♥♥」
ブリブリ
ブリブリ
ドバッ
ズズキキ


●REC
『ぼっ♥♥』
『』
ドゥ
ズ
ルゥ
おぉぉぉぉぉぉ
あぅ


●REC
びくびくっ
ドクッ
「おお～❤ほ❤ほほ❤えらいぞぉ文香❤ひひひ❤最高の気分だ❤」
ビュルッ
ブビュルッ
ビュルッ
ガク
ガク
ガク
「若いアイドルにガキを産ませながら射精❤やはりこれほど気持ちのいいものはないなぁ～～❤」
「……」
おぎゃあ
おぎゃあ
ドチャ


●REC
「お～お～❤あれだけ薬をキメてたわりに随分元気な子供じゃないか❤頑張ったな～文香❤」
メポォ
ぼっぱ
ぼっか
「しかし休んでる暇はないぞ？腹が引っ込んだらアイドルにも復帰せにゃならんし…それにすぐ二人目も作るからな❤」
『！』
ドロ…
ガク
ガク
「なあに子育てはプロデューサーに任せればいいし…お前は儂との子作りに集中してればいいから❤」
おぎゃあ
おぎゃあ
ガク
「なあプロデューサー？それが文香のためだからな」
「は…はい…」


●REC
「ようし、そうと決まれば早速セックスするか♥出産直後のま○こもまた乙なものでな♥」
メポォ
ぼっか
ドロ…
はぁ
がク
「ひひひっ♥絶対逃がさんぞ♥死ぬまで儂のガキを産んで産んで産みまくる♥それがお前の存在価値だ♥わかったな？」
はひぃ
がク
がク
おぎゃあ
おぎゃあ

「あ、終わった？（笑）」
「なんだ、来てたのか全然気づかなかったぞ」
「結構前から着いてたよ～でもみんな文香ちゃんの出産に夢中になってるからさ～（笑）」
なで
なで
「か、楓さん……」
「ふふ……♥お久しぶりですプロデューサーさん♥」
「仕方ないから楓の母乳飲みながら待ってたんだよ♥」
ちゅぱ
ちゅぱ
むにゅ
「まだ出産前なのに出るようになってさ♥これもお薬の副作用かな？んちゅ♥んちゅ♥あ～楓ママのおっぱい甘くておいしい～♥」

「もう♥ご主人様ったら…ホントに仕方のないおっきい赤ちゃんでちゅねぇ♥私の身体をこんなにした張本人なのに…♥」

「んぷぷ♥」

「ほら見てください プロデューサーさん♥お腹だけじゃなくておっぱいも大きくなったんですよ♥貴方と会ったときからは想像もできないみっともない体型になってしまって…♥」

「う……」

「はっはっは、嬉しそうにしおって(笑)そっちの調教も行くところまで行ってるな(笑)」

「やだなぁおじさん 僕たちは夫婦なんだから子供ができて喜ぶのは当たり前じゃん♥ね～楓♥」

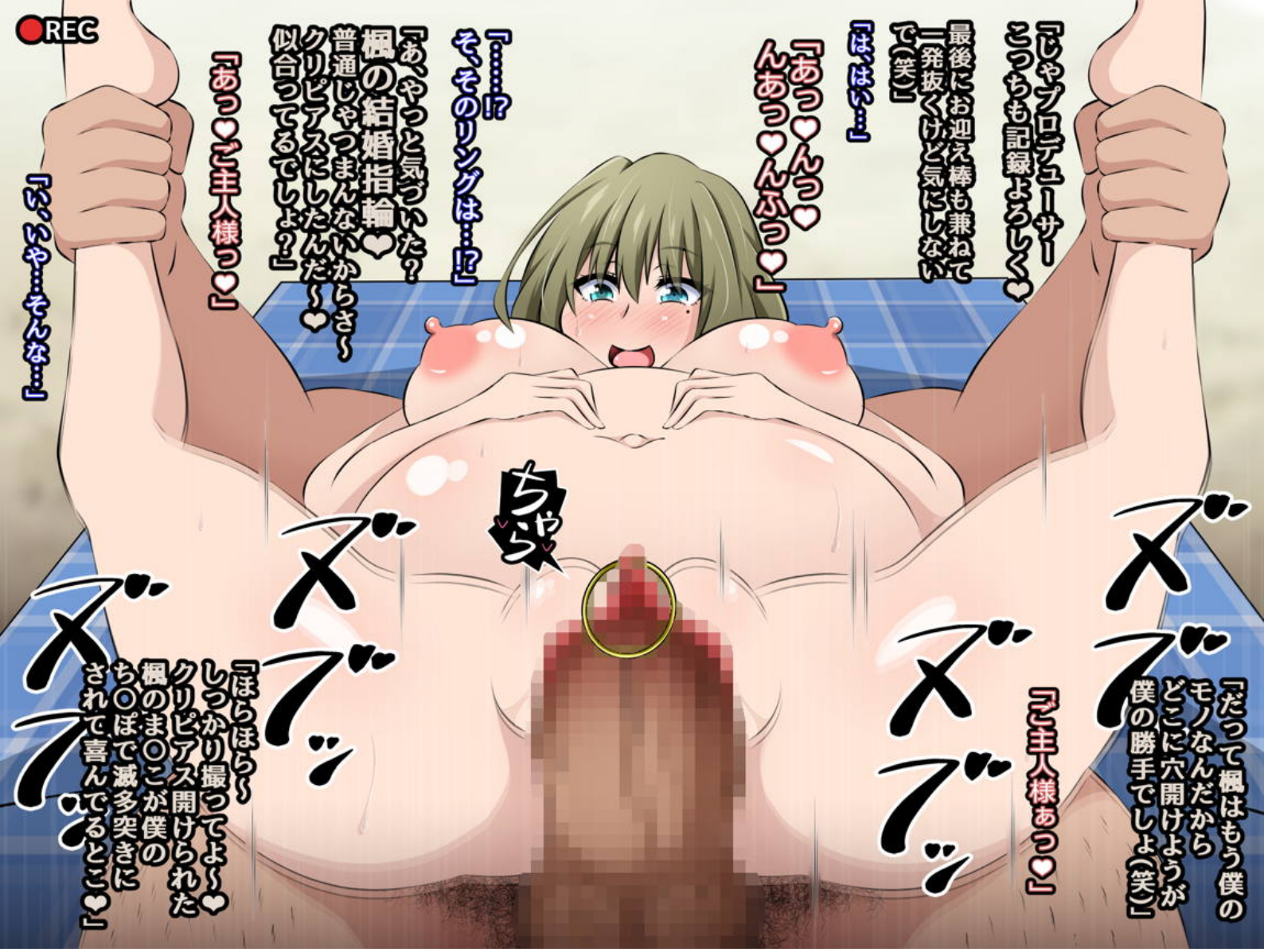
「はい♥」

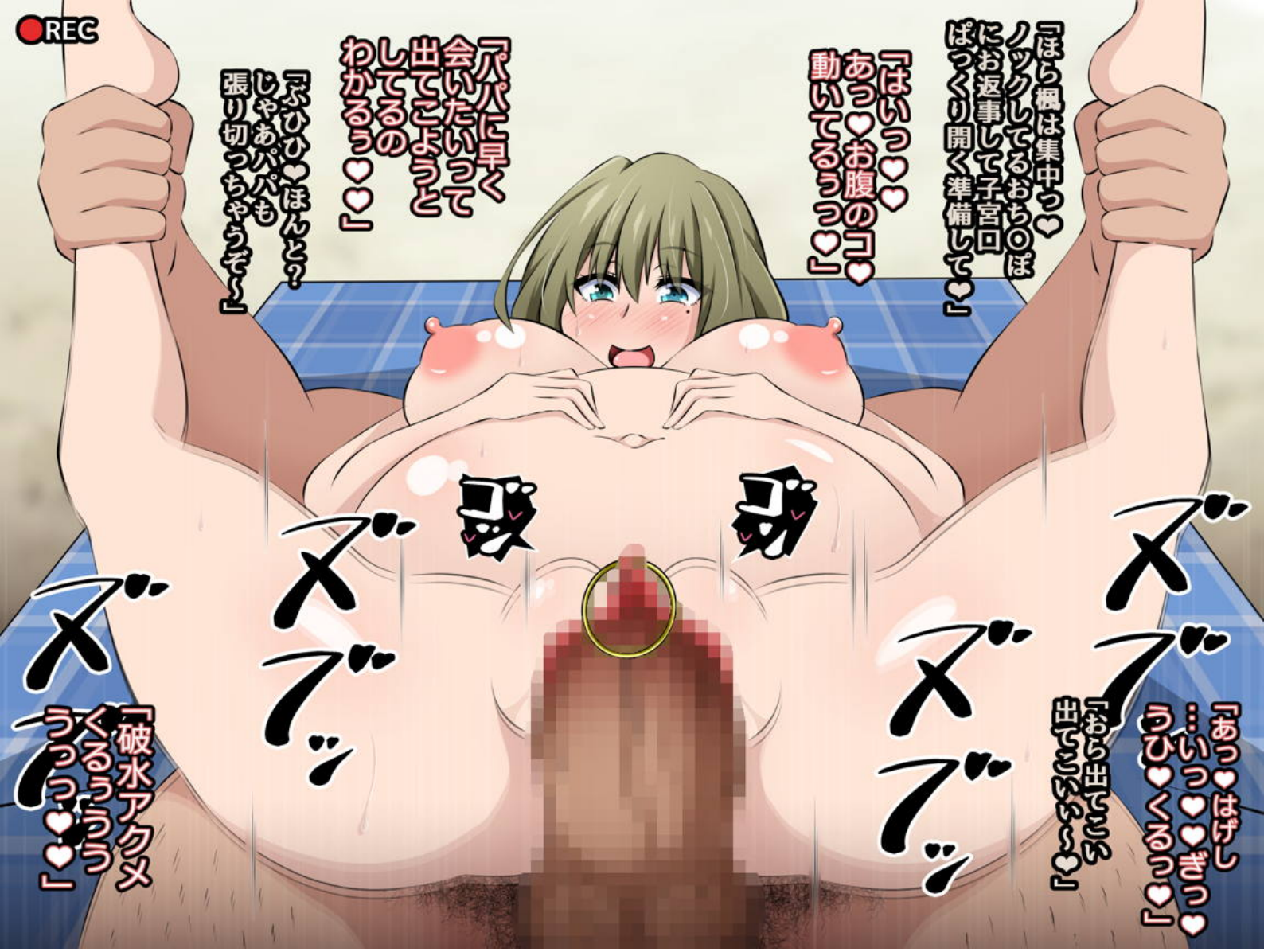
ちゅぱ

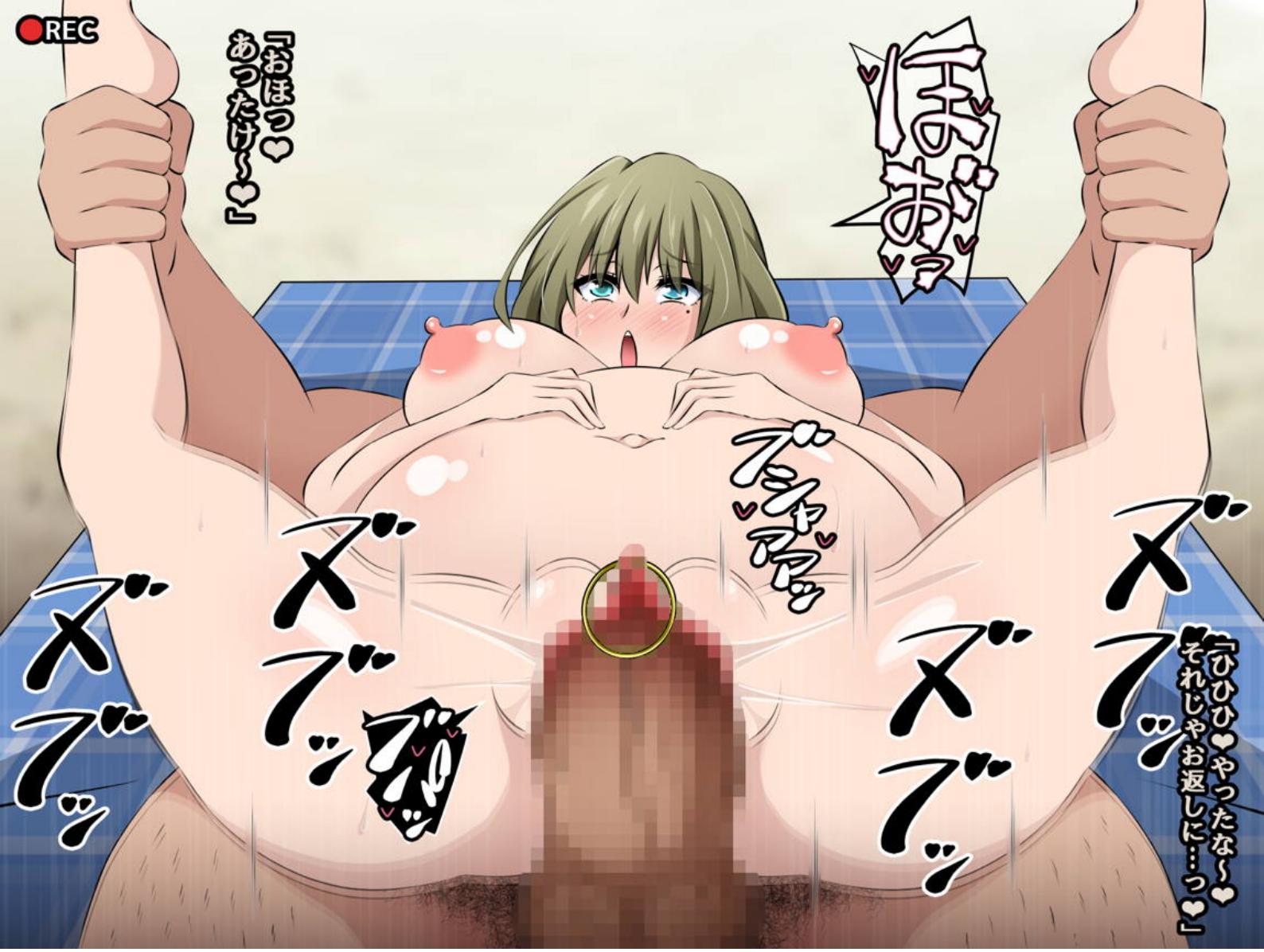
ちゅぱ

むにゅ

「さ～て、じゃあそろそろ楓も出産しようか♥プロデューサーもお待ちかねみたいだし(笑)」
「い、いや……」
「♥♥♥はい…ご主人様♥」
「陣痛促進剤も飲んで♥準備完了です♥」
ごっくん
ちゅぱ
ちゅぱ
むにゅ
「いやぁ～このふかふかボテ腹枕がなくなっちゃうのは名残惜しいけど…♥まあまた孕ませればいいし♥」
「とにかくまずは第一子♥産んじゃおうね～♥」


●REC
「じゃプロデューサーこっちも記録よろしく♥
最後にお迎え棒も兼ねて一発抜くけど気にしないで(笑)」
「は、はい…」
「あっ♥んっ♥んあっ♥んふっ♥」
「……!? そ、そのリングは…!?」
「あ、やっと気づいた? 楓の結婚指輪♥普通じゃつまんないからさ~クリピアスにしたんだ~♥似合ってるでしょ?」
「あっ♥ご主人様っ♥」
「い、いや…そんな…」
ちゃら
ズブッ
ズブッ
ズブッ
「だって楓はもう僕のモノなんだからどこに穴開けようが僕の勝手でしょ(笑)」
「ご主人様あっ♥」
「ほらほら~しっかり撮ってよ~♥クリピアス開けられた楓のま○こが僕のち○ぽで滅多突きにされて喜んでるとこ♥」


REC
「ほら楓は集中っ♥ノックしてるおち○ぽにお返事して子宮口ぱっくり開く準備して♥」
「はいっ♥♥あっ♥お腹のコ♥動いてるっっ♥」
「パパに早く会いたいって出てこようとしてるのわかるっ♥♥」
「ふひひ♥ほんと？じゃあパパも張り切っちゃうぞ～」
ゴッ
ゴッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
「あっ♥はげし…いっ♥♥ぎっ♥うひ♥くるっ♥」
「おら出てこい出てこいい～♥」
「破水アクメくるううううっっ♥♥」


●REC
ほぉぉっ
「おほっ♥あったけ～♥」
ブシャアアッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ブッ
ズブッ
ズブッ
「ひひひ♥やったな～♥それじゃお返しに…っ♥」

●REC
「ほいっ♥」
ぶっ!?
ゴドビュルポポポポッッッ
ド
ぶぅ
「ほっほほ～♥羊水に精液まぜまぜ最高お～♥」
「ほ～らパパのにがぁいミルクでちゅよ～♥♥」

●REC
「か、楓さん……」
「ふぅ～♥よ～し、破水もしたし、これで後はガキをひり出すだけだね♥」
「ふぐ…っ♥ふ、ふぅ～っ♥ふぎぃ～っ♥」
「ほら頑張れ楓～♥頑張ってプロデューサーに母親になるところ見せてやれ～♥」
「はひいぎ…っ♥みっ♥見てくださいプロデューサーぁあああ……っ♥」
ブル
ズキズキ
ブル
「私がっ♥ご主人様の子を産むところおおおお～ッ♥♥」
ズキズキズキズキ
ドロ
ズロォ
ブル
「しっかり…見…あッ♥♥あぁぁぁぁぁぁッ♥♥」

REC
「あ…!!」
「おっ♥」
ぁぁぁぁぁぁ
ズ
ぁ♥
ルゥ

●REC
はぁ～っ
はぁ～っ
「ひひひっ♥産まれたぁ～っ♥ついに楓から僕の子産ませてやったぞぉ♥ほらプロデューサーも祝って祝って♥」
「お…おめでとうございます…」
「お～元気な女のコ♥きっと楓に似てかわいいコだな～」
ガワ
「プロデューサーもご苦労様♥おかげで楓がぶっさいくな顔して出産する感動の映像を残せたよ(笑)」
ガワ
おぎゃあ～
ドチャ
「ひひ、これもネットに上げちゃおうかな～♥この感動はみんなで分かち合うべきだよね(笑)」
ガワ

「それじゃあプロデューサー子育ては任せるぞ(笑)」
ほっ
メボッ
「儂らはセックスで忙しいからな♥」
メボッ
ほっ
おぎゃ
「……」
あおっ
メボッ
おぎゃ
「ひひぃ〜♥楓の出産直後ま○ことろけるぅ〜♥♥」
メボッ
おっ

「あ、あの…出産したばかりなのに二人の身体への負担が大きいんじゃ……」
ほっ
メボッ
「そうだよぉ♥ママになったばかりの楓ま○こ安心するぅ♥」
おギャ
「いやいや、君は出産直後のま○こを味わったことがないからそんなことが言えるんだ。そういえば君は童貞だったか(笑)」
メボッ
ほっ
「この奥の奥まで開ききった子宮でち○ぽを柔らかく包まれる快感♥これは今しか食えない希少品なんだよ♥」
あおっ
メボッ
おギャ
「まさに母の愛♥おち○ぽ子宮に帰って超心地いい～♥」
おっ
メボッ

「それに二人の顔を見たまえ どう見ても喜んどるだろ♥」
あはメボッ
メボッ
「子を産んだばかりの母親がしていい…ましてやアイドルがしていい顔じゃないぞ♥」
メボッ
ちっぽけなおくっ
メボッ
ビクッビクッ
「文香…楓さん……」

「まあそうしょげるな君にはそのコたちがいるじゃないか(笑)」
あはメボッ
メボッ
「そうだよお僕たちの愛の結晶なんだからしっかり育ててよね～(笑)」
メボッ
「まあいきなり二人は童貞には荷が重いかもしれんが(笑)」
ちっぽけおくっ
メボッ
「わからないことがあったら他所のPにでも聞いてみろ。この業界アイドルは大体寝取られてるからほとんどのPは子育ての経験があるぞ(笑)」
ボクウ
「は、はい……」
「ぼやぼやしてる暇はないぞ？すぐに二人目を――うっ♥」
「おっ♥ほほ♥射精るう♥」

「んん～❤やはりぱっかり開いた子宮に精液をぶち撒けるのはたまらんな❤」
ブチュウウウウ
ドゼュゼュゼュ
「あ～最高お～❤出産してまつさらにリセットされた子宮初汚し～❤処女ま○こレイプしたときよりイイ❤」
ハーレム
ゴポポポポ
ブゼッ
ゼュゼュゼュ
『……』
「すぐに二人目を仕込むからな❤さすがにすぐは無理だろうが…」
「薬を使って無理矢理排卵させれば来月にはいけるだろ❤」
「あ、もちろん楓もね❤」

「なあに安心しろ
アイドル業務の方は
その半年に詰め込んで
不眠不休で働かせるから。
金も大事だからな(笑)」
「ほれこのコたちも
こう言っとることだし♥
まあ腹が完全に引っ込んでいる期間は…そうだな、
半年あればいい方だと
思っていてくれ(笑)」
「引退した楓はお家で
ゆっくりしてようね~♥
ハメ撮り動画売れば
金にも困らないし(笑)」
「え……」

ぶぎゅうぅぅぅぅ
ぶぎゅうぅぅぅぅ
ぶぎゅうぅぅぅぅ

ぶぇへへぇ
ブヒュウウウ
ドッ
ドゼュゼュ
「それじゃあ
これからもよろしく頼むよ
プロデューサー(笑)」
ゴポポポ
ブゼッ
ゼュゼュゼュ
ぶたりょう
「……はぁ…」

えへへ
ブチュウウウ
ブッ
ドゼュゼュ
ポポポポ
ブセッ
ゼュゼュゼュ
ぶたいりょう
「それじゃあこれからもよろしく頼むよプロデューサー(笑)」
『……はぁ…』

その後彼女たちがどうなったのか…
それは誰にもわからない。

きっと男たちの言う通り――
二人は妊娠できなくなるか
飽きられるまで孕み続け、
プロデューサーは
言われるがまま産まれた子
を育てていくのだろう。

洗脳催眠には誰も
逆うことはできないのだから…

おしまい❤